

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 105 号

鵠沼書店物語.....	福地美沙子... 1
「芥川龍之介ゆかりの場所をめぐる」に参加して.....	森岡 澄... 6
相模国準四国八十八ヶ所のうち	
藤沢橋周辺の大師像の動向.....	有田 裕一...10
「くげぬま断章」(V)	
書生精神に生きた蘆花.....	山上 英男...17
鵠沼の雨乞い行事	岡田 哲明...26
Coffeebreak「鵠沼とわたし」	綿谷 克延...32
今井達夫遺稿⑩	
「望郷」	今井 達夫...34
「望郷」の背景について.....	岡田 哲明...48
渡部 暲 副会長追悼ページ.....	会員有志・編集...51
活動の記録(平成24年4月~9月)	総務担当...67
編集後記	70

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

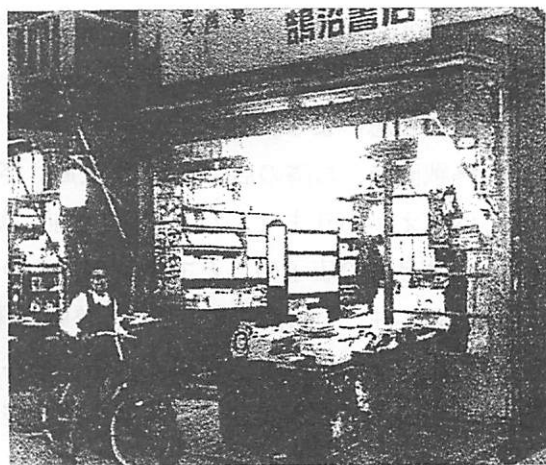
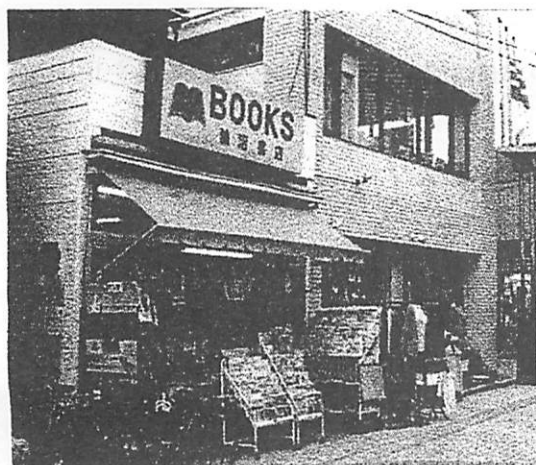
鵜沼書店物語

福地 美沙子（会員）

鵜沼書店は、今年、平成 24（2012）年春まで、じつに 80 年もの間、店の場所も当初のまま、ずっと鵜沼の皆さまに可愛がって頂きながら営業を続けてまいりました。

父、福地誠一が創業致しました鵜沼書店は昭和 60（1985）年に父が没し、後を引き継いだ私も 27 年間頑張って参りましたが、昨年末に骨折し、以後、体調も健全とはいいい難く、やむなく店を閉めることを決断せざるを得なくなりました。

長い間、御最良下さった鵜沼の皆様にご心から感謝申し上げます。



鵜沼書店外観今昔

父は明治 42 年、福地平八郎、キク（旧姓栗本）の長男として生まれましたが 3 歳の時に父親（私の祖父）と死別し、母親（私の祖母）の実家の敷地内で育ちました。

父の母親の実家（栗本家）は元来、東京深川で材木商を営んでおりました。そして関東大震災の前後頃から小田急が開通する時期あたりに鵜沼に土地を求めたようです。鵜沼海岸駅前の書店を始めた場所に 60 坪ほど、また、駅より線路沿いに片瀬江ノ島駅方面に少し行った所にも 200 坪ほどを所有しておりました。

鵜沼書店は昭和 7（1932）年、父が 23 歳のときに鵜沼海岸駅前の方の地所で創業しました。そこは、それまで貸家にしていて何でも借主が本屋だったという

ことを聞いたような気がします。定かではありません。当時、お店は8坪、その後ろが住居で、通りに面した南側は貸していました。鎌倉彫の店のあと食料品店が入りましたが、昭和27年に売却致しました。その後も御近所の業種はいろいろ変わりましたが、鶴沼書店は変わることなく続けてきたのです。

父は幼少の頃、人と交わることが苦手で、(今で言えば「登校拒否」で困ったものです…) 学校も尋常高等小学校を出たばかりで、上の学校への進学を断念したのですが、独学で書物からいろいろな知識や教養を身に付けたようです。

私も数学と英語は中学から高校1年くらいまでは父に教わりました。

本屋というのは、そんな父にとって、書物に囲まれて過ごす毎日が約束された理想的な職業に映ったのではないのでしょうか。そして、店番をしていれば、ふっと立ち寄って下さる作家や教養ある人たち、辻直四郎、長谷川巳之吉、逸見重雄、大久保洋海、富士山、子母沢寛、邦枝完二、立原正秋、芥川比呂志、影山光洋、黒崎義介、菅沼五郎、今井達夫、高木和男… まだまだいらっしゃいましたが、すぐには思い出せません。これら文化人とのお付き合いから父は多くのものを頂いたのだと思います。

終戦直後、お隣の店で、「湘南文庫」が開かれたそうです。当時まだ幼かった私には覚えがありませんが20年ほど前に知りました。

父は自分の店子のことですから、この件に協力したものと思います。

《編集注：「湘南文庫」とは、終戦直後の昭和20年8月19日、鶴沼に住む林達夫、畑中政春、伊東安兵衛、長谷川巳之吉、山沢種樹、南部圭之助、邦枝完二ら文化人が各自の蔵書を持ち寄って開設した貸本屋兼簡易図書館で本鶴沼の金田松月邸と鶴沼海岸駅前と2か所で開設された文化活動である。

このことは会誌『鶴沼』83号(2001.9.30刊)に「二つあった『湘南文庫』」伊藤聖会員、「お店で見かけたお嬢さん*」桑原玲子会員、「鶴沼文化史をかざる一駒」金田元彦元国学院大学教授がそれぞれ執筆している。

*お嬢さんとは邦枝完二の娘(エッセイスト木村梢：俳優木村功夫人)のことで、開設の準備、掃除から店番まで手伝いをした》

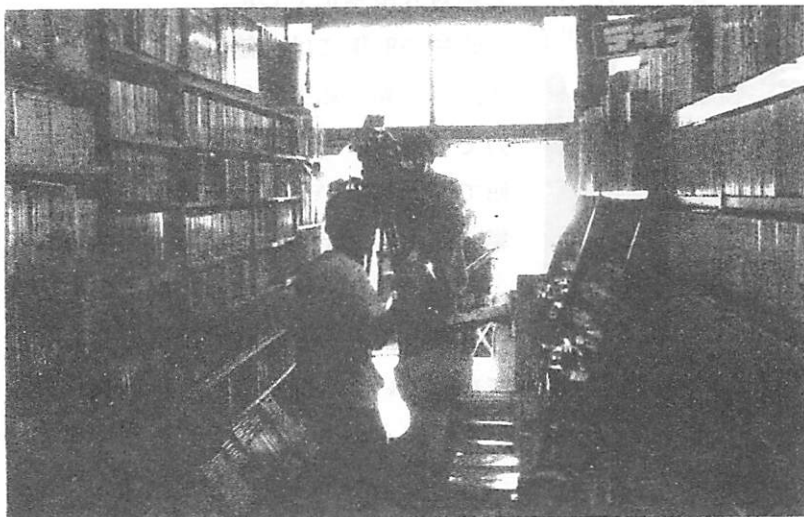
のちに鶴沼を語る会の会長もされ、「鶴沼海岸百年の歴史」の著者である高木和男さんとは特に親しくして頂き、エスペラントを習得したのも高木さんに薦められたからです。高木先生曰く「僕より遅く始めたのに先に覚えちゃうんだよ——ワッハッハ」今でもはっきりと私の耳に残っています。先生は腰の低いユーモアのある方でした。

戦後数年経ってからと思いますがアサヒグラフから広島・長崎の原爆被災状況を撮った写真の特集*が出た時、父は、この惨状を世界に知らせようと、世界各国のエスぺラントの支部に送ったのだそうです。ところが、どこからも受領の挨拶も礼状も来なかったと残念がっていました。今思えば、検閲されて排除されたのかも知れません。《編集注：*1952年8月6日号》

私は昭和17年生まれですから戦後の鵜沼書店しか知りませんが、物心のつく頃の店には、大学ノートや鉛筆、消しゴムなどの文具も売ってありました。父の撮った昔の写真にも「書籍 文房具 鵜沼書店」と看板に見えます。

日本の高度成長期には出版物、印刷物がふえ、人気のある雑誌はなかなか希望部数を配本してくれません。そんなときは出版社に直接出向いて、足りない分を仕入れて担いで帰って来たものです。そんな思い出の一つ。懐かしいとおっしゃる方もいると思いますが「スタイル」という雑誌があり、大変な人気でした。父はスタイル社に行き、追加を買おうとしましたが、応対に出て来た宇野千代のあまりのハデさに、びっくりしたそうです。妖艶な彼女はカタブツの父の目にどう映ったのでしょうか？興味がわきます。《編集注：「スタイル」は宇野千代が昭和11年～昭和34年刊行した服飾雑誌、彼女は副社長を務めた》

うちの店がTVドラマのロケに使われたこともありました。TBS 金曜ドラマ2006年に放映された山田孝之、沢尻エリカ主演の「タイヨウのうた」第8話（9月1日放映）で沢尻の親友役の佐藤めぐみさんが本屋に立ち寄るシーンでした。



書店内を撮影中のTVカメラと佐藤めぐみさん

鵜沼という土地柄か、商店はみな配達をしました（昨今はすっかり少なくなりましたが）。酒屋さん、八百屋さん、魚屋さん、お蕎麦屋さん、クリーニング屋さんなど。本屋も例外ではなくて、毎月購読の雑誌や、注文を受けて出版元から届いた本などは頼まれたお宅に配達をします。辻直四郎、長谷川巳之吉、逸見重雄、大久保洋海、富士山、大類伸、高木和男…といった諸先生のお宅は毎月の配達リストに入っておりました。月刊誌のいうのは各誌の発行時期が重なることが多いものですから、この時期の配達業務は結構大変でアルバイトを数人雇わないと処理できませんでした。

労働力といえば、雑誌の配本は駅止めのことが多かったのです。ですから雑誌が駅に着くと取りに行かねばなりません。これもなかなか骨の折れる仕事でした。

店を閉じる時「又、鵜沼の文化がひとつ消える。口惜しいなあ。悲しいなあ」とおっしゃるお客様がいらして「書店冥利につきる」と思いました。

父と写真

父の趣味は写真でした。それもフィルムの現像から引き出し焼付けまで全部一人でやるのです。2階に上がる階段の突き当たり、タタミ1畳ほどのスペースを



展示会場の父

暗室にしていました。私たち子供は邪魔だからと絶対入室禁止でした。

昭和 58 年には、鵜沼でこつこつ撮り溜めた作品から高木和男先生はじめ有志の方々のご尽力で「鵜沼の五十年」という展示会を鵜沼公民館で開催していただき、展示写真は一冊の写真集『鵜沼の五十年』となって出版されました。

父が何気なく切り取った鵜沼の町の様子が、今となってみると時代の証言として貴重な資料になっていると聞くと、地域文化の役に立って本当によかったとつくづく思います。

（ふくち みさこ）

(寄稿)

写真展「鶴沼の五十年」と私の写真

福地 誠一

「鶴沼の五十年」展（9月16日～18日、於 鶴沼公民館）はお陰様で大成功に終わりました。3日間の会期中、推計1,000人を超える参観者の方々と世話人役を買って出られた方々に厚く御礼申し上げます。

然し、50年とは我乍ら驚きました。昭和初期あの写真を撮っていた頃、まさか50年後にこの写真で展覧会のようなことをしよう等とは思ひも寄らぬことでした。自分も随分古くなったものだと思更のように痛感します。だが、私の写真はもっと古いのです。大正11年私が13歳の頃、時恰も日本は素人写真と称するアマチュア写真のブームがピークに達した頃でした。雑誌「少年倶楽部」にまで「写真の現像と焼き付けの仕方」といった記事が載り、これを読んでカメラが欲しくてたまらなくなり、東京深川に住んでいた自分は銀座4丁目迄カメラを買いに行ったことを覚えています。それは箱型の所謂ボックスカメラで値段は4円50銭でした。正直のところこのカメラは玩具に等しいもので満足なものは撮っていません。

翌大正12年、母親にせがんで大枚13円50銭の大金を出させヴェストコダックを買ったが半年後には例の関東大震災で東京は火の海と化しカメラも焼いてしまいました。それから約9ヶ月が私の写真のブランクが続きましたが、翌大正13年に国産の機械を買って以来今日まで60年余、だらだらと牛の涎のように、何の野心もなく、ひたすら万年アマチュアの道をよくも飽きずに歩き続けて来たものと自分乍ら呆れ返っています。然し、その長い年月の間に分かったことは只一つ、趣味事は長年、時には一生続けないと、その深奥を究めることが出来ないということでした。

私は今日でも撮影から引き伸ばしまで一貫して自分の手でやっていて人に委せません。それは青年時代に読んだ入門書に引き伸ばしをマスターしなければ自由な表現は望めないと書いてあり、引き伸ばしに於ける様々な技法が述べられていたことが、自家引き伸ばしの大きな魅力となったからでしょう。それで今日でもモノクロに専念しています。モノクロ独特の美しさ。一般には余り分らないかな？

*会誌「鶴沼」17号 昭和58（1983）年11月8日発行 より転載

「芥川龍之介ゆかりの場所をめぐる」に参加して

森岡 澄（会員）

7月10日、例会のあと、中島明氏の先導で総勢17人、鶴沼公民館から歩き始める。暑い！いや熱い！

私は本来、時間を気にすることなく気の向くままに漂うのが好きだ。作家における幼児体験とか、原風景を巡るということに感興を覚えてからは、西へ東へどれだけ歩いたことだろうなどと書き出してみたが、誰だって旅とはそういうものであるに決まっている。

湘南鶴沼この町は明治、昭和日本の名だたる文化人が、ふと現れ、ふと消え、類が友を呼び、創作し知る人ぞ知る名作を生んだ、まさに由縁の町といえよう。

僕の内に見ぬ友が増えて行った。羅列したらきりのない先達諸氏を友などと呼ぶのはおこがましいが、そんな人たちの人となりや時代を考え、心の中で対話することに喜びを懐いている僕としては「鶴沼を語る会」が為すことは、老年を先延ばししてくれる嬉しい集まりである。

T氏から「思ったこと何でも良いから書けば良い」にほだされて、承知してしまったものの、芥川龍之介は読んでいない。記憶にあるものは子供のころ読んだあるいは読んで貰った『アグニの神』と『杜子春』ぐらいで『アグニの神』は清水良雄の挿絵と共に思い出すことが出来るけれど、これもあとで読み直したりした印象におおわれている面がないとはいえない。途中から例の青年（書生？）が出てくるところで、突然、何か日常的なものにつながって、それまでの神秘的な雰囲気、ガラリとくずれるようなところの戸惑いを今でも思い出す。文中、コウモリが羽を広げたような形…というのを清水良雄の絵では、その影が壁に映っている姿が強く印象に残っている。それに比べて普通のありきたりのオーバーを着て立っている書生の姿がどうしても違和感があって納得できなかった。

それからずっと後になってから読んだと思うけれど『侏儒の言葉』がある。書棚から変色した岩波文庫を探して読み返して（斜め読み）みると序の言葉に『侏儒の言葉』は必ずしも私の思想を伝えるものではない…ただ私の思想の変化を時々伺わせるにすぎぬものである云々。この序言で、僕は芥川の数々の箴言を素

直に受け入れる自分になっていることに気づいた。

箴言集のなかに「床屋政治家」という言葉が出てくる。当時の小林理髪店で顔をあたりながら、客同士の巷話を聞いた芥川自身の造語かしら。

『蜃気楼』——ある秋の午頃、僕は、東京から遊びに来た大学生の K 君と一緒に蜃気楼を見に出かけて行った。鵜沼の海岸に蜃気楼の見えることは誰でももう知っているであろう。現に僕の家の中などには逆さに舟の映ったのを見「この間の新聞に出ていた写真とそっくりですよ」などと感心していた。僕は東家の横を曲がり、次手に O 君も誘うことにした。不相変赤シャツを着た O 君は午飯の支度でもしていたか、垣根越しに見える井戸端でせっせとポンプを動かしていた。僕は桑皮樹のステッキを挙げ、O 君にちょっと合図をした。——

僕はここで思わずストップしてしまった。近年、一世を風靡したハリーポッターは、孫（小学3年）とともに僕を夢中にさせたが、その主人公ハリーポッターが使っていた杖がトネリコなのだ。記憶を確かめるために孫に話したら「トネリコの杖はセドリックだよ。大親友のセドリックの杖がトネリコだよ！」と指摘されてしまった。ハリーの杖はヒイラギであった。

昨今は、花屋の店頭でもトネリコの若木を目にするが、北ヨーロッパの聖木、北欧神話に現れる宇宙樹イグドラシル (Yggdrasil) は同属の西洋トネリコ（原産地は地中海）であるといわれる（『花の王国②薬用植物』荒俣宏：平凡社）

ハリーポッターに現れるトネリコの杖、芥川の蜃気楼にさりげなく使われたトネリコのステッキ。何の脈絡もないといえばそれだけのことだが、また一方の考えを試すならば、僕の内に目眩とも陽炎ともつかない蜃気楼がゆれるのである。

我々、鵜沼を語る会の仲間は、蜃気楼の現場と目されるサーフビレッジのあたりに着いた。中島氏の指さす方角には、「平和の像」が黒く聳えていた。長崎のそれとともに、昔から馴染めないでいる。

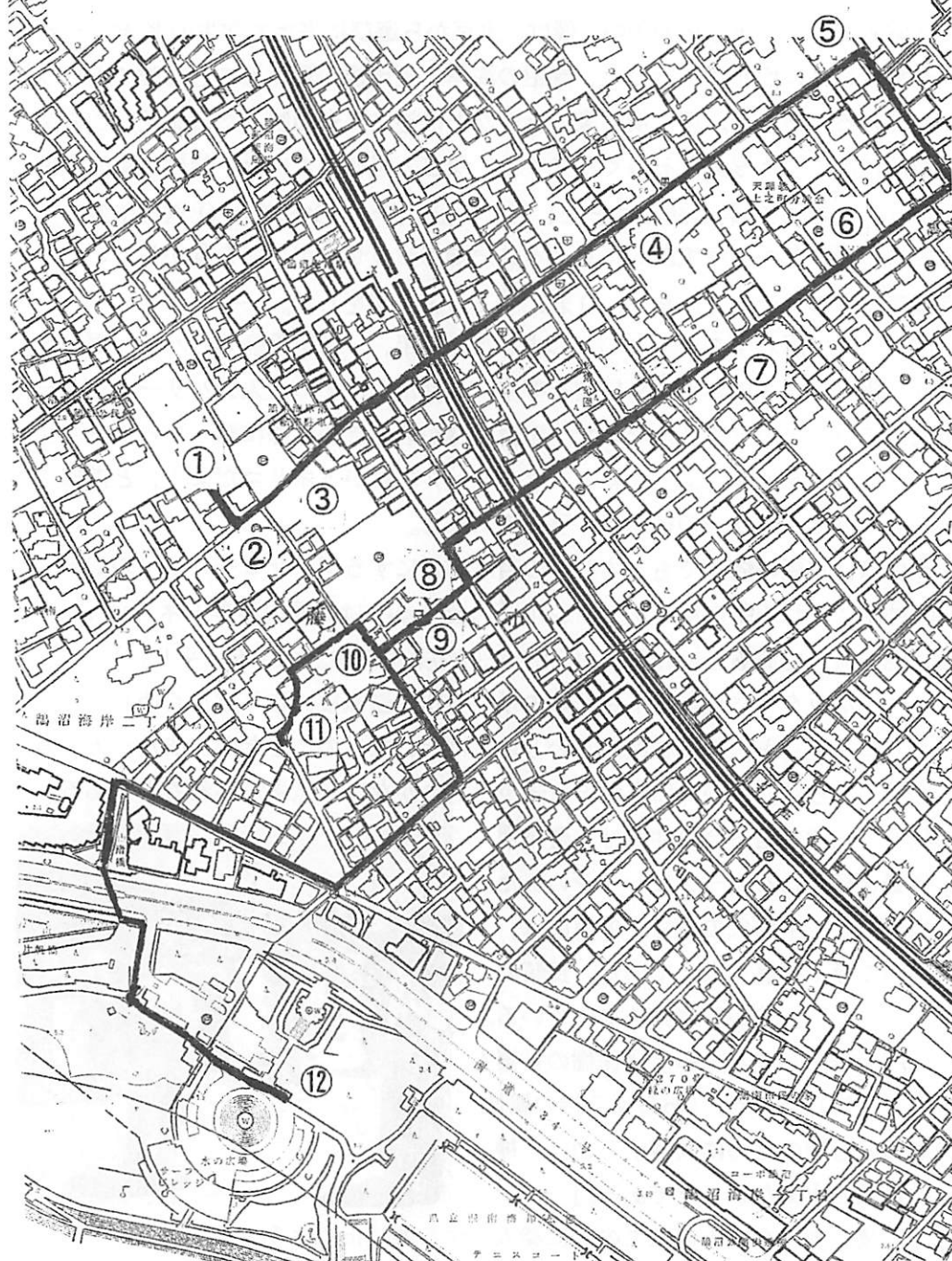
一度で暗記してしまった『侏儒の言葉』の中に「神」がある。「あらゆる神の属性中もっとも神のために同情するのは、神には自殺の出来ないことである。」



この稿を書きながら僕はこの人に深入りするのは止めようと思った。

（もりおか きよし）

鵜沼を語る会 「芥川龍之介ゆかりの場所めぐり」順路図



鵠沼を語る会 「芥川龍之介ゆかりの場所をめぐる」順路説明

- ① 鵠沼公民館裏門—東屋海浜口門柱
- ② 料亭「東家」跡—伊東将行の隠居所「イの1号」に妻縫が昭和8年「鵠沼ホテル」を開業。孫で養子の伊東将治が昭和25年に料亭「東家」開業し、平成7年12月に廃業した。
- ③ 旅館「中屋」跡—明治43年頃貸家の筋向いにあった「対江館」を、田中安、カネが買い取り、「中屋」と名を変えて営業。大正9年に島田清次郎が「地上」を、10年には吉屋信子が滞在して「海の極みまで」を書く。孫の上村安一郎が特別養護老人ホーム「上村鵠生園」を開設した。
- ④ 長谷川巳之吉邸跡—第一書房社主、豪華な装丁の文芸書・詩書を刊行。パールバック「大地」で大当たりした。岩佐又兵衛の国宝的絵画「山中常盤物語」の海外流出を阻止した。鵠沼には昭和14年に松が岡一丁目(富士見坂)に来て、当地に18年より29年まで居住。
- ⑤ 「悠々荘」跡—芥川最晩年の作品に「悠々荘」がある。葛巻左登子さんより「楽々荘」があったことを聞く。反対側に「三楽荘」があったので、所有者の阿部氏に尋ねたところ、前の所有者二宮氏は大正7年より関東大震災後の昭和7年まで所有していて、その後に阿部氏が購入したが、その当時芥川が書いた家や庭のたたずまいは正にそのまま残っていたとのこと。又、二宮氏が在住当時に近隣に住む画家岸田劉生がしばしば訪れたことが「日記」に書かれ、「落々荘」としている。上記の証言や調査で「悠々荘」はここ阿部さん宅であると推定。松が岡4-14-5
- ⑥ 川口省吾邸跡—ハーモニカ演奏家でいち早く自己の奏法を完成してハーモニカ全盛時代を作り上げた。特に横浜訓盲院での長期にわたる無料指導等、児童の器楽教育に貢献した。当地に昭和4年より49年まで居住。妻川口芝香も書道家で多くの弟子を育てた。
- ⑦ 内藤千代子邸跡—女流作家明治41年「田舎住まいの處女日記」で文壇デビュー。明治41年から大正8年までに、婦人雑誌「女流世界」を中心に発表した作品が次々とベストセラーになる。明治30年頃に父が土地を購入して藁葺の家を建て、大正14年没するまで居住した。
- ⑧ 「齒車」の理髪店—芥川最晩年の作品「齒車」の冒頭に出てくる「或理髪店の主人」が、営業していた「小林理髪店」(現柳川理髪店)。鵠沼海岸商店街に現存する最古の建物(築約90年)戦前の床屋の面影を残すと、近隣に居た古陶器評論家の中島誠之助氏は会誌に掲載。
- ⑨ 「イの4号」・「隣の二階家」—芥川龍之介は大正15年4月～7月までしばしば「東屋」に滞在。7月20日に妻と三男也寸志の3人で貸別荘「イの4号」に転居し9月20日頃に西側にあった「柴さんの二階家」に転居。年末に再度「イの4号」に移り翌年1月4日に引き払い田端に帰った。
- ⑩ 旅館「東屋」跡—明治30年頃伊東将行が創業し長谷川栄が女将として経営した高級旅館。海岸までの広い2万㎡(6000坪)の敷地に松林と池があり、本館および離れが点在していた。昭和14年9月に廃業するまでの約40年間に、時代を代表する多くの文人、文士が逗留して、「文人宿」と言われた。芥川は大正7年、11年、15年としばしば訪れている。平成13年3月佐江衆一、小山文雄両氏のご協力で鵠沼を語る会が旅館「東屋」記念碑建立。
- ⑪ 「東屋」の離れ・二階家—明治44年に谷崎潤一郎が滞在し「悪魔」執筆。大正7年3月にも谷崎が滞在して「金と銀」「小さな王国」等を書いた。この時佐藤春夫と芥川龍之介はしばしば訪れている。またここには、作家の白井喬二が昭和32年一年余り滞在し仕事場にしていた。
- ⑫ 「蜃気楼」をたどる—大正15年10月に当時、横浜高等工業の学生だった元会長の高木和男氏が鵠沼海岸に蜃気楼が出ることを発見し、新聞に報道され評判になった。それを聞いた芥川龍之介は友人を誘って海岸に蜃気楼見物に行ったことが、最晩年の作品である「蜃気楼」に描かれている。その当時の道筋をたどってみよう。

藤沢橋周辺の札所、大師像の動向

有田裕一（会員）

鶴沼を語る会は、2008 年 9 月、明治大学名誉教授圭室文雄先生の講演会を開催した。私たちはこの講演を聞いて、鶴沼を發生の地とした「相模国準四国八十八ヶ所」という札所があることを知った。これは鶴沼の住人、浅場太郎右衛門が発願し、普門寺の住職、大東観音堂庵主の協力を得て今から 200 年ほど前に成立したものである。私たちはこの鶴沼を発信地とする文化遺産の存在に感銘し、過去の資料を調べたが、それは今どうなっているのか、各札所の現状調査をしようということになった。それで 2009 年の鶴沼公民館祭りには鶴沼地区の札所を紹介し、2010 年春、当会会誌「鶴沼」100 号記念号には全 88 か所の調査結果を特集し、あわせて「相模国準四国八十八ヶ所めぐりガイドブック」を刊行した。さらにその秋には藤沢市文書館主催のセミナーでも調査結果の発表をおこなった。

明治元（1868）年、明治新政府が発表した太政官布告「神仏分離令」は仏教排斥と受け止められ廃仏毀釈思想を生んだ。また明治 4（1871）年太政官布告「寺社領上知令」により寺社は境内以外の所領地を失い、経済的基盤を失った所も多く、これらは廃寺廃堂に追い込まれる結果となった。この調査で分かったことは相模国準四国八十八ヶ所の大師像が本来の場所から他の寺院、堂宇などに移されたものが 30 か所以上に及んでいたことである。しかしながら大師像そのものは 88 体のうち、存在不明のものはわずかに 2 体に過ぎなかった。長い年月の間、地元の人々に大師信仰が守られて来たものと感慨深いものがある。

23 番と 60 番の混同あるいは取り違えについて

蔵前町の鼻黒稻荷社境内の小堂に安置されている第 60 番札所日照山金剛院の大師像の台石には「西国八十八箇所内第廿三番阿州薬王院写 光明真言蔵前町安全」と彫られている。

元来、第 60 番日照山金剛院は藤沢宿第 1 番札所感応院の末寺で寛政年間（1624～1644）に中興再建されたものが天保 2（1831）年藤沢宿の大火で焼失しそのまま再建されず明治 7（1874）年に廃寺となったという。金剛院のあった場所は、現藤沢小学校の北側に当たり、その東隣にあった第 23 番札所光輝山常福寺も感

応院の末寺であるが、天保7年にまたも発生した火災のために焼失した。のちに小堂が再建されたが、これも明治7年廃寺となり本尊などすべて感応院に引き取られたと伝えられている。

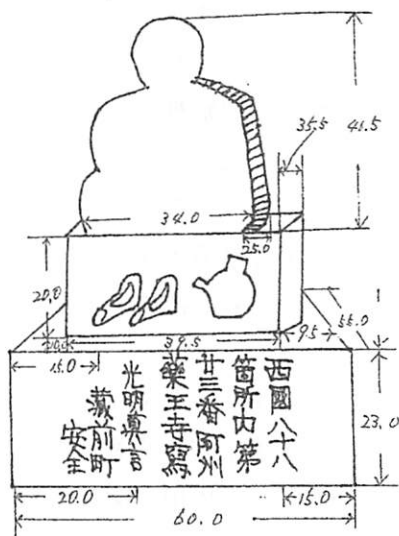
第1番札所感応院には現在大師像が2体祀られている。1体は、当院のもの、2体目が第23番常福寺のものといわれている由縁である。

蔵前60番の大師像の台石に第23番と刻字されていることについて、藤沢に古くから住む石渡一良氏が「わが住む里」53号に載せられた一文を目にし、私は氏の論旨に同感を覚えたので石渡氏の意見を要約しここに紹介する。

石渡氏の論旨

『23番常福寺、60番金剛院の二寺は廃寺になったが、墓地はそのまま残った。昭和20年代後半、藤沢小学校の防災上の見地から学校の敷地内に消防車が入れるよう学校側からの要望もあり墓地の一部を進路とすべく当該地の墓石を他に移すことになり、感応院の墓地に移ったが、それまで入町厄神社側にあった小堂の中の大師像も感応院に移された。』と述べられている。

蔵前大師像 実測図 別図①
(単位 センチメートル)



この小堂の大師像の移転は石渡氏およびその父上や弟さんも確認しておられ、この頃まで少なくとも1体は常福寺墓地にあった訳である。この大師像が60番で23番は廃寺のあと檀家の多かった蔵前に移転したのではないかと私も考えるのである。

台石の刻文に対する疑問

蔵前 60 番の台石に 23 番と刻字されていることについて、三木洋著「相模国準四国八十八箇所 弘法大師像をめぐる」の記述内容にも石渡氏は疑問を投げかける。

三木説とは「23 番が感応院に移転して台石は不要となり 60 番に流用されたのではないか」というものである。

『前ページの図のように、下段の台石には先に記したように「西国八十八箇所内第廿三番阿州薬王院写 光明真言蔵前町安全」と刻字されているが、ちょうど真ん中で薬王院写が終わっている。もし 23 番の石を流用したのなら、元々は光明真言以下の文字はなかった訳で、字配りがアンバランスである。もし流用するなら刻字を削るか、刻字面を出さないで石組するであろう。

金剛院の檀家が多い蔵前に移し、その時台石を新しくしたのではないか。蔵前の人たちはこれが 23 番と思い込んでいたのではないか。とすると常福寺墓地に昭和まであった大師像の方が 60 番だったのではないか。』と石渡氏は推論されている。

この像はいつ蔵前の稲荷社に移されたのか。稲荷社の境内にあるということは稲荷社の建立の方が古いことになる。

この稲荷社は本町通りにあった正月屋（境川の廻船業）の所有でその屋敷神であったという。祭神は鼻黒稲荷といい、この稲荷社と同じ祭神が近くの砂山観音内にもう 1 社あり、こちらは藤沢橋詰の旅籠「青柳楼」の屋敷神であった。

当時の商店は間口の寸法で税が掛ったため、間口が狭く奥行きの深い地形が多かった。段々に手狭になり屋敷神を敷地外に設けるようになったという。

正月屋は本町通りで相当規模の商家であつたらしく平野雅道氏作成の「東海道藤沢宿（文久 2 年）復元図」にも載っているから正月屋が蔵前に移って来たとは考え難い。

石渡氏が指摘するように廃寺から何十年も経ってから 60 番を蔵前に移転する時、わざわざ 23 番の台石を流用するであろうか。加藤徳右衛門著「現在の藤沢」に、蔵前に広田という石屋があつたと記載されている。広田が彫ったものかも知れない。ちなみに広田は賀来神社の鵠沼海岸顕彰碑を彫った石工である。

先日、私は石渡一良氏の令弟石渡淳文氏を訪問し、蔵前稲荷内の大師堂の格子扉の錠を開けて頂き写真（p2 に掲載）を撮らせて頂いた。台石は 2 段になってい

て、水差しと杢を彫った上段の石は大師像と同じ材質だが下段の「第廿三番…」の刻字のある石材は明らかに違い青みがかった堅そうな石である。角の摩耗もなく前述のように制作年代が違うのではないかと思われる。ではいつ下段が設けられたか、境内には古い鳥居の礎石が保存されており、それには「維時明治三十三年立春二月上旬日建立」とあり、大師移転時期の参考になるであろうか。

存在不明の2体とは

不明の2体は、共に藤沢橋周辺にあった第12番札所舟久保不動院と第58番札所金砂山観音堂の大師像であって、これらはどこに行ってしまったのであろうか。

第12番舟久保不動院については手掛りがない。三木洋氏も樋田豊宏氏の説を引用しているが、それは「震災後一時船玉社に移されたが以後不明」というものである。

第58番砂山観音堂の大師像

この堂の古い記録はないが寛永年間(1624～1644)に金井守清の次男、太郎左衛門清仲が再興したという。

観音堂は明治の初め相当痛んでいたもので廃仏毀釈に便乗してお堂を壊したり、燃やしたり、土台や石段は売って酒代にしたり、自分の家に使ってしまったらしい。観音堂の推移について「藤沢市史研究6号」に丸山久子氏が明治30年生まれの金井チカ刀自に取材『金井チカ刀自今昔譚』を発表している。

それによると、大正の初期には砂山から移った観音様は遊行寺のイチョウの木の下の小堂に置いてあった。ところが、川岸町の家に祟りがありイチツコの「観音様はもとの町内に戻りたい」とのお告げから、元の観音堂の下の角田商店(今は3階建のビル)が先達となって寄付を集め、大正6年、元の場所にお堂を建立したが、関東大震災でまたもや倒壊した。現在のものはその後の修復である。

再興された観音様は毎月の縁日には賑わいを見せ、特に鶴沼の一流どころのご隠居さんが盛んにお参りしたという。大師像のことに金井刀自はふれていないが、明治初めの廃堂のとき、行方不明になった可能性が大であると思われる。

不明の1体は法照寺に？

さて、ここから先は私の個人的想像になるのでお許し願いたい。

鶴沼宿庭にある法照寺は皇国地誌鶴沼村の項に「西京浄土宗知恩院の末派とす。寛文元(1661)年辛丑、僧龍保一庵を開基し宝永元(1704)年甲申五月僧欣誉之

を中興改造して法照寺と号す」とある。

この法照寺境内には現在、大師石像が2体あり、それぞれ小堂に祀られ参道を本堂にむかって進むと左側に2堂並んで建っている。向かって右側が第48番札所といわれ、堂前に石の標柱があり、正面「南無大師遍照金剛」側面「四国八十八ヶ所之内」「第四十八番伊豫西林寺写」裏面「示時天保五年辛午三月関根重三郎」とある。左側の像は町内のものと近所の人々はいいい伝えているという。

しかし、大師像を比較観察すると、その作風、大師の容姿表情、大きさ、石の材質、風化の度合いなど非常に似ていて、一人の石工によってほぼ同時期に制作されたものと思われ、この2体は浅場太郎右衛門発願の88体のうちの2体に違いないと私には思えるのである。



とすれば左側の大師像は、第12番、第58番のいずれかのものという推測が成り立つのである。

また法照寺に関して「わが住む里」37号に花輪桂氏による以下の記述がある。

弘法大師木像2軀 御丈 夫1尺5寸 御手後補 彩色

内1軀は文政年間安置、他1軀は昭和2年、普門寺より移遷

おなじく「わが住む里」46号に法照寺に関して有賀密夫氏による以下の記述がある。

相模国準四国八十八ヶ所（一） 右端にある弘法大師座像 71 cm

相模国準四国八十八ヶ所（中央にある）

昭和51年6月17日 建築 総工費 11万3千円

宿庭町内 関根久男以下12名（省略す）

昭和2年9月21日 発起人 関根勝五郎 鈴木吉五郎

筆者は法照寺の年一度の開帳の日である 8 月 9 日、同寺を訪れた。法照寺の本堂内正面には 7 体の仏像があり向かって右から

- 1) 善導大師像（木像彩色 60cm）
- 2) 円光（法然）上人像（木像彩色 60cm）
- 3) 寺に関わりの深かった方（付属小桶に斉藤の銘）の木像
- 4) 阿弥陀如来立像（木像金箔 67cm 元の本尊）
- 5) 十一面観世音立像（木像金泥 100cm）
- 6) 寺ゆかりの方の木像
- 7) 閻魔大王（木像 60cm）

が祀っており、川瀬住職（藤沢法円寺住職が兼務）のお話しでは 3) 6) いずれかは女性との言い伝えがあるそうだが、あきらかに、この 2 体は弘法大師像ではない。花輪氏は弘法大師木像 2 体と記されているが、石像 2 体の誤りであろうか。

また、有賀氏のいう右側は一般に言われるように第 48 番であり、中央（左側の意？）の像は札所番号は記載されていない。このお堂建設費用が 11 万 3 千円、出資者が宿庭町内関根久男以下 12 名。建設時期が昭和 51 年の意である。

昭和 2 年 1 月発起人、関根口五郎、鈴木吉五郎というのは、花輪氏のいう普門寺より移遷を指すものと思える。

以上、全くの推測だが、第 58 番砂山観音の大師像が普門寺にはいり昭和 2 年法照寺の檀家に譲り受けられたと考えるのは無理があるだろうか。

（ありた ひろかず）

引用・参考文献

皇国地誌

藤沢民俗文化 8 号 藤沢市教育文化研究所

藤沢市史研究 6 号 藤沢市文書館刊

わが住む里 37 号 藤沢市中央図書館刊

わが住む里 46 号 藤沢市中央図書館刊

わが住む里 53 号 藤沢市中央図書館刊

東海道藤沢宿図復元図 平野雅道編

相模国準四国八十八箇所 三木 洋著

現在の藤沢 加藤徳右衛門著

書生精神に生きた蘆花

山上 英男 (会員)

鶴沼の月夜以来、ぼくと敏君の関係はすっかり一変した。一片の誓詞をとりかはしたわけではなく、一語の将来を約したわけでもない……が、あとにも先にもただ一回、我を忘れての握手にぼくらはもう金輪際解くべからざる関係を結んだのである。 (徳富蘆花『思出の記』)

◆ 鶴沼の地でむすばれた恋

上の一文は、この小説のおわりちかい部分で、語り手のくげ・菊池慎太郎が、松村敏との恋の成就を確信する場面である。

それにしても、つつましいラブシーンである。明治23年旧暦7月の十五夜の鶴沼が、その舞台に選ばれた。当時、別荘地として開かれたここは知識階級の男女が恋を語るのにふさわしかったのだろう。

120年後の今はサーファーが恋をみのらせている。

この長編は、明治33年3月から1年間「国民新聞」(日刊)に断続的に掲載された。連載終了後の5月には単行本になり、やがて中等教育の教材としても作品の一場面が抜粋され、近代の文体として若い感性に刺激を与えた。

80歳代の方に聞くと、その多くが旧制中学のときに面白く読んだという。昭和16年には大木惇夫作詞、古賀政男作曲で歌謡曲にさえなっている。

しかし高度成長期にはいった昭和30年ごろからは次第に読まれなくなり、今では岩波文庫でさえ絶版となった。

その昭和30年に高校生だった私も、蘆花は読んでいない。

蘆花と聞けば『不如帰』……それは祖母のはなしから、新派的な雰囲気の大衆小説だと思い込んで敬遠し、それっきり蘆花文学とは無縁にすごした。

ところが後年、あるサークルで＜文学史事象としての大逆事件＞というテーマに取り組んだ折り、私たちを導くK先生から「大逆事件とその後の＜冬の時代＞は政治史上のみならず文学史上でも決定的なエポック」だという指摘をうけ、この事件を契機に日本の現実を思索した作家について学んだ。

そのなかに『謀叛論』の蘆花がいたのである。

『謀叛論』については後にふれるが、大逆事件に示した蘆花の、あの叛徒弁護の命懸けの行動を育んだ素地を探ろうとサークルでは『思出の記』をとりあげた。

円本（一冊一円の全集）のはしりである改造社の『現代日本文学全集』を手もとに持ちながら、『自然と人生』以外は読んだ形跡がない＜蘆花集＞を私はひっぱりだし、そこに収められたこの長編を、その折はじめて読んだ。

◆ 出合いで培われたもの

慎太郎は没落した家の苦しみを負い、また母の期待を背負って青少年期を生きた。その波乱万丈の半生が回想される小説である。

明治11年、大久保利通の暗殺で記憶される年に家は破産し、父もその秋に亡くなった。時に慎太郎、明治の年号と重なる11歳であった。

造り酒屋を営む熊本在の豪家で、何不自由なく成長してきた跡取り息子にとって、この暗転はつらい。「田舎はじつに窮屈なもの。いはば小さな盆の水、砂利一つ落としてもすぐ津波だ。むすめの襟がかはっても村中の問題を引き起こす。くしゃみ一つ快くせられない。それも村第一の豪家である時分はともかくも、零落した日になるとじつにたまらない」のである。

親類知己がいる村で、しかし落ちぶれてみればたちまち針の筵の境遇である。貧しさ故にこうむる＜差別＞というものの過酷さを幼き日の慎太郎は知っていく。

零落してみえてきた現実であった。

母子は馬の背にゆられ、このつらい故郷をあとにしたのである。

頼った先は母の姉の夫、この地方の名士である野田伯父であった。

この伯父から吾が子のように可愛がられた慎太郎は、教育の機会を与えられる。貧しい中で育った戦前の多くの日本の少年たちは、こんな「あしながおじさん」のような援助者が自分にもあればと憧れる気持ちで読んだかもしれない。そんな僥倖にめぐまれる。

僥倖ではあったが、しかし彼はそれに甘えない。

まず12歳からの2年間、漢学塾の中西西山先生との出合いをしっかりと生かす。塾生はみな筒袖、厳寒でも足袋なし。飯は粟4米6、これを輪番で炊く。12

歳の少年にたいしても仮借ない。西山（せいざん）先生もみずから裏の山に自然薯を掘り、すりこ木をとってとろろ汁をつくり子弟にふるまう。

「苦もあったが、愉快も実に少なくなかった」のである。慎太郎はそれを生き生きと語る。たとえば塾生総出の＜兎狩り＞の行事、まさに男の子の世界だ。少年読者は作中人物といっしょになってわくわくしたろう。

・・・収穫が済み、裏山のもみじが染まる頃になると兎狩りの季節だ。少年たちはいそいそとその日を待つ。その日が来れば、「炊事番は夜半に起き握飯を拵へる。皆塾の庭に勢揃ひする頃は、もう午前の三時過ぎでもあらう。有明の月白く冴えてゐる。三度関の声を上げて月影を踏んで・・・野路を行く」

大人組が網を張るなど準備の間、塾生はそこらに積んである藁塚や粟殻で焚火をし、夜明けを待つ。中には「一抱へ甘藷を盗んできて、藁灰に焼いて、談笑しながら食ってゐる」云々。

少々の逸脱にはめくじらを立てない。成長期の男の子が発散するエネルギーをおおらかに見守る目が、そこにはある。今の社会はそれを失っていないか。

こうした日々も含め、西山先生という人格が一貫して少年たちに培ったものは「艱難辛苦に耐へる身体と独立独歩の気概」、そして凜とした人間的誇りをもった生き方であった。

慎太郎という人間の基本的な素地がつくられた2年間である。

この2年間の修業が終わるころ、事情があつて西山塾が閉じられた。明治十年代も後半の自由民権運動が高まる時代、「潮の漲る如く変はつて来た時代」であつた。その風を受け、慎太郎は野田伯父が関係する育英学舎に入学し、ここで彼は終生の師と仰ぐ駒井先生と出会う。

漢学の西山先生が「社会の外に超然としてゐた」の対し、英学の駒井先生は「育英学舎の窓を社会に明け放し」自由平等の理想を生徒たちに掲げてみせたのだ。

師弟は「ともに理想の光明界をさしてまっしぐらに進み」「“自由”の聲に躍り、“純潔なる志望”に胸をたぎらせ」る。この中で、慎太郎は「旗幟を鮮明にすること」を喜び、「傍観者でいること」を恥じる気風を学んだ。

しかしやがて、駒井先生もここを去る時がきた。別れにあたって先生は「諸君も自分もともに真理の一兵卒としてゆくゆくは濟世の志を抱く者、行末ともに誘惑に克ち、時俗に溺れず、死にいたるまで書生の精神を失はず、彼こそかつて育英学舎に学んだ者と衆目のめじるしになりたい」とのべた。

特に、この「時俗に溺れず、書生の精神を失わず」ということばは、慎太郎という人間の生涯を貫く生き方の規範となる。

<書生>といえば、時に、その言は青臭く、観念的な理想にはしり、現実をわきまえない者という意味で使われる。が、書生の本来は、ある作家が言ったことだが「地上の営みにおいては何の誇るどころはなくとも、その自由な高貴の憧れによって時々神とさえ住める・・・特権を持った者」のこと、真実を求める上では損得勘定なく生きることができる者のことであった。

この精神の自由を自己の中に生涯持ちつづけようと決意するこの場面は、蘆花の原点を見る思いだ。

このあと、慎太郎はさまざまな出来事に巻きこまれながらも関西学院への入学を果たし、そこでのキリスト教との対話や思索を経てさらなる成長をとげる。

これまでは人生への懷疑というようなものにとらわれる暇もなくまっしぐらに生きてきた慎太郎であったが、ここでの青春は内面へ向かった。

特に、首席を保ってきた友人の矢吹君が「人は何のために生まれてくるのか」と煩悶し、人生の目的がただ立身出世にあるとすれば実につまらぬことではないかと言いつつ残して自らの命を絶ってしまったことは慎太郎に衝撃を与えた。

人生に懊悩し、人生を模索するこの内的遍歴は、彼を人間の深みへ導いた。その模索から、将来は伝道師になろうとさえ思ってもいた。

ところが、慎太郎に「宗教者となるよりも文学の道を歩まぬか」と勧め続けていた菅先生が、その講話「迷信と信仰」によって、偏狭な宣教師たちから非難され学院を追われるという事件が起こり、卒業を半年後に控えた慎太郎だったが「思想の自由、言論の権利のため」に立ち上がったのである。

これは西山先生、駒井先生によって耕された精神が発露したもの、まさに「書生精神」のあらわれであった。またここには明治初期のプロテスタンティズムによって耕された自我が発揚されてもいる。

慎太郎はついに自説を曲げず、あえて退学の道を選び学院を出奔した。

◆ ある通俗さ

この長編は、慎太郎の波乱に満ちた青春、よき出会いで培った青春をこの学院退学の場面まで生きいきと語り上げてきた。

回想される半生のほぼなかばである。話はなかばなのだが、しかし緊張した描

写文体はここで閉じられる。

そして、これ以降は、出来事の経過説明といった感じの文体になっていく。

学院出奔後、苦学して帝国大学に入ったことや駒井先生との再会、文筆の道を選んだことや松村敏への恋愛感情など、これまでどおり綿密に語られはするのだが、なぜか感動が薄いのだ。

これは、それまでの冒険が今日の母子共に満足できる幸運をもたらしたのだが、今やそこに満足してしまっている慎太郎しか見えてこないからだろう。

またその幸福感を少しも疑うことなく語っていく語り口が、どこか小市民的でさえあることへの物足りなさなのかもしれない。

例えば、冒頭に引用した「鵲沼の月夜」のくだりを経て、慎太郎は松村敏と結ばれていくのだが、その結婚が、没落した菊池の家の再興を願いつづけ、また旧来の家族制度を生きる慎太郎の母親と摩擦を引き起こすことはない。良妻賢母を求める家の論理に従うことに慎太郎は何の違和感もないようなのだ。

「僕は確かに天与の二大幸福を得る。賢母と良妻とである」と自賛する慎太郎のこの語り口に、読者はある通俗さを感じてしまうのではないだろうか。

日本的近代が生んだ新旧世代間の矛盾はここにはあらわれてこない。＜青鞥＞も、いとこの鈴江をからかう冗談口の中だけにとどまる。

明治も20年代に入り、時代がおおきく屈折してくる。

保安条例による自由民権運動への弾圧は慎太郎の周りにも及んだが、作者である蘆花は、慎太郎がそれらとかかわるような場面を設定しなかった。

したがって、この前近代と妥協した日本的近代の持つ矛盾と、「幸いなこと」に慎太郎は衝突することがなかったのである。

慎太郎が得た「幸福」の外側を、民権の翼を折られた日本の近代が流れていったのだ。

◆ 書生精神の回復

『思出の記』の後半部で、慎太郎をこのように描いたことに、蘆花自身、どこかもやもやした感情を残したのかもしれない。

後年、『みみずのたはごと』の＜印度洋＞という章で、次のような出来事を記している。

「・・・三年前、余は印度洋を東から西へと渡った。三等船客の中に欧州廻り

で渡米する一青年があつて『思出の記』を持ってゐた。余はそれを甲板から印度洋へ抛り込んだ。『思出の記』は一瞬水煙を立てて印度洋の底深く沈んでいったやうであつたが、彼小人菊池慎太郎が果たして往生したや否は疑問である」

往生したかどうかはわからないが、往生させたかつた慎太郎・・・それは、後の蘆花の言動から推測するのだが、明らかに『思出の記』後半の慎太郎である。

それにしても、著者とはいえ他人の本を海中に投げ込むような、その癡癡には驚かされる。蘆花のこうした癡癡は、人間として極めて真摯で求道的な生真面目さ故なのだろうが・・・そうした短所も含めて蘆花という人間の面白さが、ここには見えてくる。

同時に＜あるべき慎太郎像＞を、また＜書生の精神＞を作家内部に回復させようとしつづけていた蘆花が、ここには見えてもくる。

明治39（1906）年のエルサレム巡礼とトルストイ訪問。明治40年の歟をとる生活、今で言えば＜スローライフ＞にあこがれての千歳村への移住。まさにこれらは、蘆花自身の人間を回復するのに必要な行動、書生精神の具体的なあらわれであつた。

だから、明治44年の大逆事件における叛徒弁護も、蘆花にとって、自分を回復する＜人間の条件＞であつたのだ。決して衝動的な行動ではない。

書生精神を志向しつづけた、その持続のなかから立ち現れてきた行為なのだ。

◆ 謀叛論の蘆花

大逆事件とは、よく知られるように、明治43年、絶対主義天皇制国家のもとで、性急な解放を求めた宮下太吉ら数名による天皇暗殺計画を利用し、幸徳秋水ら無関係な社会主義者、無政府主義者を大逆罪に問い、社会主義を萌芽のうちに摘みとろうとしたフレームアップ・暗黒裁判の弾圧事件である。

蘆花は、この者たちの処刑阻止にむけ、時の首相桂太郎へ嘆願しようとするなど必死の行動を起こした。しかし秋水をはじめ大石誠之助や内山愚童など12名の死刑をとどめることはできなかった。

明治44年1月24日処刑。蘆花44歳・・・間に合わなかったという無念の思いの中にあるとき、旧制第一高等学校での講演依頼があつた。

処刑からわずか8日後の2月1日、蘆花は『謀叛論』と題し、若き学生に向け、秋水たちの志を弁護し、この処刑を批判する講演を行った。

「・・・我々はここに十二名の謀叛人を殺すこととなった。ただ一週間前の事である。僕は幸徳君らとは多少立場を異にする者」だが、「彼ら是有為の志士である。自由平等の新天地を夢み、身をささげて人類のために尽さんとする志士、殺したくはなかった」（岩波文庫『謀叛論』）と語る。

「我々は・・・殺すこととなった」と言い「殺したくはなかった」と言う。この表現、蘆花がこの事件を＜我々の問題＞として引き受けているということだろう。傍観者でいられない蘆花である。

「幸徳君らに大逆の意志があったか、なかったか、僕は知らぬ。大審院の判決通り真に大逆の企があったとすれば残念に思う。暴力は感心できぬ。自ら犠牲となるとも他を犠牲にはしたくない。ゆえに大逆罪の企に万不同意である。しかし同時に彼ら十二名も殺したくなかった・・・」

若き聴衆に「大逆の企てがあったのか、なかったのか、僕は知らぬ」と、本当のところを知らされぬ者の憤りを含みながら、真相、真実はどうなのかと聞くものたちに考えさせていく。

また、こうやって蘆花は政府に詰め寄ってもいるのだ。

「最上の帽子は頭にのっていることを忘る様な帽子である。最上の政府は存在を忘れらる様な政府である」

ところが今の帽子、重過ぎないか。「幸徳君らの頭にひどく重く感ぜられ」たのだと、比喻を交えて日本の現状、今の政府のありように眼を向けさせる。

さらにつづけて「地位は人を縛り、歳月は人を老いしむる。廟堂の諸君も昔は若かった、書生であった」。しかし今は立派な老成人、自由への気概を失った老成人である。「自由を殺すは、すなわち生命を殺すのである」。老成人よ、若き書生の日々を思い出せ！ と今の政府を牛耳る者たちに反省をせまる。

幸徳は殺されたが、その精神は生きている、「現に武蔵野の片隅に寝ていた僕をここまで曳きずって来た」ではないか・・・。

「幸徳らは政治上に謀叛して死んだ。死んで復活した。諸君、我々は生きねばならぬ、生きるために常に謀叛しなければならぬ。新しいものは常に謀叛である」

「諸君、幸徳君らは誤って乱臣賊子となった。しかし百年の公論は必ずその事を惜しんで、その志を悲しむであろう。要するに人格の問題である。諸君、我々は人格を研くことを怠ってはならぬ」

考えぬかれた草稿を携えて、蘆花は烈々と語った。

ある論文からの孫引き資料で恐縮だが、当時学生だった人の次のような証言がある。

「・・・徳富健次郎先生は『謀叛論』と題して水も漏らさぬ大演説をなし窓にすがり壇上弁士の後方にまで居せる満場の聴衆をして咳嗽一つ発せしめず、演説終りて数秒初めて迅雷の如き拍手第一大教場の薄暗を破りぬ。吾人未だ嘗て斯の如き雄弁を聞かず」
（『向陵誌』第一高等学校寄宿寮「弁論部史」1913・6）

この日、ここには1000人の学生がいたという。

蘆花夫人は、夫がこの日無事に帰宅できたことを喜び、夫の話を静かに聞いたという学生たちを賞し「真に語り得るものは、爾曹（ジソウ・なんじら）青年ばかりである。自愛して世のいわゆる利口者となるなかれ」と記した。

夫人の心配は当然であった。また青年たちが夫を真剣に迎えてくれたこと、これは夫人自身の喜びでもあったのだろう。

岩波文庫『謀叛論』の解説で、中野好夫は「こうして公然と東京の真中で叛徒弁護の発言を行ったのは、ほとんどまず蘆花ひとりだった」と述べている。

無慈悲な天皇制国家による弾圧事件、誰も公然と、この事件に触れることはできなかった。事件当時33歳であった永井荷風は、「良心の苦痛」「甚だしい羞恥」を、そのとき感じながらも「わたしは世の文学者と共に何も言わなかった」と回顧している。

この「誰も何もいえない」専制国家への抗議・・・蘆花の行動は、ある意味無謀ともいえた。「世の利口者」にはできない、まさに書生の精神に支えられた行動といえるのではないだろうか。

そして、これを受けとめ、問題の所在を真摯に思索してくれる者は、世俗にとらわれず精神の自由に生きる「学生諸君」のほかはないと、若い世代への期待に支えられての行動でもあったのだろう。

蘆花は、この後続の世代に、未来を賭けたのだ。

そして、夫人もまたそれを十分認識していたのだろう。

鶴沼と縁の深い芥川龍之介の、一高における親しい同級生松岡譲も「この演説は一高内に議論を呼んだ」という一文を残している。

後の大正デモクラシーを支えた青年・知識人が、この議論の中にいたとしても

不思議はない。また、戦前は原則として全学生が寮生であった一高において芥川がこの議論の輪に加わっていたとしても不思議はない。

命がけで「新しいものは常に謀叛である」と述べた蘆花の思想が、その後、どうこの青年たちの中で発酵していったか、芥川の中で醸成されて行ったか、今ここで述べるゆとりはないが、わたしが属すサークルのK先生は『謀叛論』に媒介された大逆事件を抜きに芥川文学の成立過程を論じることにはできないという説を30年前に提起した。

この仮説はさまざまな検証を経て、現在、芥川文学を論じるうえの重要な視点となってきた。

蘆花が望みを託した後続の世代のひとりに、「道徳は常に古着である」（「侏儒の言葉」）と、ずばりと言い切った批評精神の持ち主、芥川がいたこと・・・これは書生精神の系譜を考えるうえでも面白い。

この芥川は、昭和2（1927）年7月、35歳の生涯をみずから閉じている。そして、わが蘆花はその2ヵ月後の9月、病に倒れ死去、58歳であった。鶴沼に縁のあるふたりが昭和2年、この世を去った。時代が、また動いた感じだ。

◆ 鶴沼の月夜に

まだきびしい残暑はおさまりそうもない。それでも夜はだいぶ涼しくなった。夜の浜辺を久しぶりに歩いてみたいと思った。

慎太郎とお敏さんが恋を実らせた旧暦7月15日は、今年の暦では9月1日にあたるそう。関東大震災忌と旧盆が重なる。

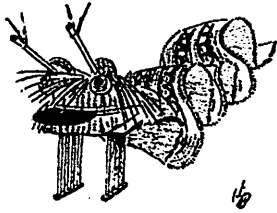
蘆花をしのびながら、あわせて芥川も・・・そして関東や阪神淡路や東日本の震災による死者の霊に思いをはせ、この旧盆の満月へ祈りを捧げるのもいい。

この日、月の出は18時11分。

21時ごろには、月はどのあたりまでのぼっているだろうか。

夜空が晴れてくれることを願った。

（やまかみ ひでお）



鵜沼の雨乞い行事

岡田 哲明（会員）

農村では、夏期に干ばつになると農作物の作柄に多大な影響があるため、じつに、多種多様な雨乞い行事の風習が日本全国各地にある。

衛星による観測で天気予報は的中するが、思うとき思うところに雨を降らす技術はまだない。雨が降らないと「雨乞い」すなわち「叶わぬ時の神頼み」となることは昔も今も変わりはない。

鵜沼でも、かつては雨乞いの行事が行われていた。年貢米制度の時代、田の少なかった鵜沼では米の減収はより切実であったから、雨乞いの行事は、江戸時代からつづいていた行事であろう。しかし、急激な都市化現象で、農地は減少し、鵜沼の「雨乞い行事」は、いつの間にか行われなくなり、人々の記憶から忘れられていった。だから、いつまで行われたか、いつやめたのか、正確な記録がない。

この忘れ去られた行事とは？

* * *

「この村の雨乞いの習慣はちょっと面白うございます。むしろと青竹で大きな蛇の形をこしらえ、両眼は、目簀に金紙を張ったもの、団子掬いってテニスのラケットに似たような格好のものが両耳、箕を二つ組み合わせて口になり、渋うちわが舌、そのなかへ人が入って、何のことはない、丁度獅子舞のように踊り狂いながら鎮守の社から練り出します。幾台かの荷車に付けた鉦、笛、太鼓でビューーヒューテンテンドンドンチャンチャンチャンキ、耳もろうするばかりに、はやし立てながら。道筋の家々では、てんでに手桶に水を汲んで待っていて、蛇の頭から水を浴びせかけます。しまいには海へ入ってさんざん暴れて流してしまうのですが、ほんとうに靈験のあったものかどうか覚えていません。」

これは、明治から大正期にかけて活躍した鵜沼そだちの女流作家、内藤千代子の『生い立ちの記』のなかに出てくる「鵜沼の雨乞いの行事」についての記述である。『生い立ちの記』は大正3年発行だから明治40年代のころの風習の描写とおもわれる。

また、高木和男当会元会長も『鵜沼海岸百年の歴史』のなかで以下のように述

べておられる。

「私が初めて鶴沼に來たのは、大正8年だが、(中略)私が鶴沼へ來て初めて出合った不思議な体験は、雨乞いの行列であった。

大正8年の夏は雨が少なかったらしく、農家は水に困っていたようだ。私は都會育ちで、雨などはいやなものだというほどにしか感じていなかったのだから、雨乞いということ自体が不思議であった外に、こんなことをしたら雨が降るという理由がわからなかった。

雨乞いの行列は、太鼓を響かせて、遠くから來ることは分かったが、見に行くと、唐簀(トウミ)を合わせて作った竜の首を先頭として、それに蓆が何枚も連なっていて、農村の方から商店街にやってくる。そして今のグリーンストアの所から海の方に曲がって行く。竜の後には、数個の太鼓のはやしが従う。見物する町の人々は、この竜をめがけて水をかけてあげるというわけである。そして、最後はこの竜は海に流されるのだという。

この夏も、翌年の夏も、雨乞いはあったが、それ以後は來なくなった。この2年のうちのどちらかの1年には、本村の方から2回も雨乞いの行列がやって來たように記憶する。部落が違ったのであろう。その頃は、本村のことは我々は何も様子が分からなかったから、どこの部落のものか、関心もなかった。」

つぎの絵は、画家、岸田劉生が転地療養のため鶴沼に引っ越してきた年、つまり大正6年の夏に妻の日記帳に描いた「鶴沼の雨乞いの行事」のスケッチである。画面左上には「八月二日 鶴沼海岸 雨乞竜の図 劉生戯筆」の書きこみがある。

この日の妻^{しづ}の日記には——パトロンの芝川照吉から100円で絵が欲しいが取り敢えず50円送るといって為替が來た。芝川にはすでに30円借りがあって、それも返せるか危ぶんでいたところにこの入金は大変嬉しいと「二人で今日はよい日だ、今日はよい日だ、と子供のように、心を楽しくうれしく浮き立たせた。近ごろにはほんとに珍しい位、気の軽く、真に楽しい感じのした日だ。」——といった内容の記述がある。劉生は早速、椿宛の手紙に5円同封し、キャンバス、ポピーオイルなどの画材を購入して送ってくれるよう依頼している。

劉生は、村人が雨を求めて雨乞いの行事をするのをこの日見て、金欠の経済状態での金乞いと、想いをダブらせたのであろうか。雨の方とはともかく、金の方はさっそく効果が現れて上機嫌で妻の日記にちょっと描く気になったのであろう。

「戯筆」というところに彼の心情が読み取れる。



葵日記八月二日の条に劉生が画いた鵜沼海岸雨乞竜の図

「岸田劉生全集」全 10 巻（岩波書店刊）

第 4 巻 月報 8 p6 葵日記抄（八）

これは劉生の記憶画である。妻の日記を持ってスケッチに出るはずがないし、スケッチ帳から妻の日記帳に描き移すとも考えられない。後年の絵日記をみると、その日の出来事が全て記憶で描いてあるから、記憶画が得意であったのだろう。

それにしても、この躍動感にあふれた村人たちの姿のとらえ方の的確さは非凡である。内藤千代子の音の描写とあいまって雨乞い行事の全貌がいきいきと伝わってくるのではないか。

また、藤沢民俗文化 8「辻堂聞書」田中宣一（藤沢市教育文化研究所刊）には以下の記述がある。お隣、辻堂村の風習である。

「雨乞い：戦前には雨乞いなどということをよくやったという。日照りが続くと雨乞いのために由緒あるところへ水をもらいに行く。昔は氏神である両諏訪神

社にゆかりのある信州の諏訪まで水をもらいに行っていたというが、そこへ行かなくなってからは、鎌倉の田辺の池の水や大山の阿夫利神社まで水をもらいに行き、その水を氏神にお供えして神主に祝詞をあげてもらい、それから蛇の作り物が町内を練ったのである。各町内ごとに麦稈で大きな蛇や蛙など雨に関係のあるものの作り物を作り何人もで担いで部落中を練り歩き、最後には夕方頃浜へ持って行き海に流してしまったという。大蛇などは五間位の長さのものを作り、箕二つを上下に合わせて口にした。練って歩く時に、各町内で作った蛇や蛙が道で出会うとお互いに争ったり、蛇は蛙を喰うのだといって追いかけてまわしたりし、たいへん騒いだものだという。各家々では井戸から汲んだ水を入れた大樽を軒下に据えて置き、大蛇などが練って来ると、待ってましたとばかりに思いっきり水をぶっかけたりして景気をつけたという。」

この行事がいつ頃から行われなくなったのか

「藤沢民俗写真集（三）」昭和45年2月刊には「数十年前まで行われていたままに再現して頂いたものである。」と記載がある。黒崎義介の絵本（1979年）には40年前までとあるし、高木和男は大正末にはすでに見かけなくなったと書く。また、大東の関根老は大正8年が最後であると言われたという。年代的にややずれがあるが大正から昭和に代わる前後頃に消滅したと推定される。

戦後、この行事の再現を試みた記録が二つある。

一つは「藤沢民俗写真集（三）」藤沢市教育文化研究所発行のなかに、昭和39（1964）年の夏、鶴沼神明の古老たちの指導で「雨乞い蛇」の制作と行事の実演を再現し15枚の写真で紹介している。頭部の作りは内藤千代子の描写とほぼ一致するが、最後に棕櫚の葉っぱを頭に載せて出来あがりという。

二つ目は平成5（1995）年10月に行われた「鶴沼公民館祭り」で「鶴沼を語る会」が「雨乞い竜」を作って展示したことである。その一部始終を「鶴沼70号・関根佐一郎氏宅を訪ねて」（同年8月10日）に川島孝子会員は、虫送りの行事とともに雨乞いの行事について関根老（当時85歳）から聞いた内容を以下のように記述している。

「雨乞いの行事は年中行事ではなく、日照りが続く夏に行われた。農具や日常の台所用具を材料に用いて竜の形を作り海岸まで練り歩く。

大きな箕を二つ合わせて口を作りその上に小振りの箆を伏せて目とし、竹で角を作り、ペンキで彩色して頭部は完成。胴部は箕の端から縄を両側に結び、その

上に六間位の長さに菰を載せて出来あがる。作成する者は村の決まった人物が当たったという。

完成された竜は皇大神宮でお祓いを受け胴体の菰の下に人が入り海へと練り歩く。その前後には町内の人たちが木車に載せた太鼓を賑やかに叩きながら連なる。

竜の歩く道の両側では人々が雨を乞うて菰に向かって水を掛ける。菰が水をかぶって段々重みを増し海岸に行き着くまでにふらふらになり、まさに蛇行そのものだったという。(中略)」

さらに川島会員は展示用の雨乞い竜の制作現場に立ち会われ、その制作の過程を以下のように記録されている。

「同年 10 月 19 日、再び関根氏を訪問し、ひろい前庭で竜作りに挑戦、榛葉さん稲葉さん有田さん佐藤さん川島の 5 名、途中、川上さんが顔を出される。関根氏の同期で友人の山口仙太郎氏のお二人が小学生の頃を思い出されてのご指導のもと竜作りを始める。材料はすべて榛葉さんが準備して下さい。

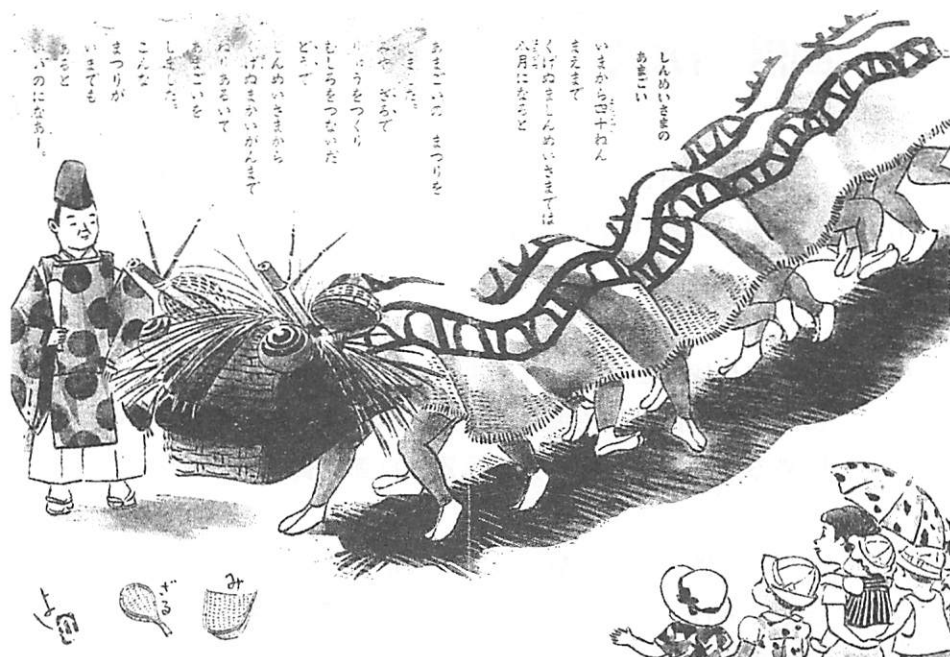
大きな箕を二つ合わせて口を作りその上に小さな箆をつけて止めアルミ箔で覆い頂上に黒紙を貼って目を作る。口元に鋸状に切った銀紙の歯を付け口中に赤塗の渋うちわを入れて舌とし、笹の角をつけ、細竹を箕の先に付けて支えとしその上に菰をかぶせて終了。

出来あがった竜は恐ろしいというよりも、ちょっぴり雨蛙に似たユーモラスな竜となった。雨乞いの竜、公民館祭りの間だけは効力を発揮しませんように。」



この公民館祭りに展示された「雨乞い竜」には耳がない。制作指導された方々が「小学生のころの記憶」というから耳の欠落もやむを得ないことである。

また、鶴沼在住だった童画家の黒崎義介も郷土の行事紹介の絵本に雨乞い竜を描いておられる（本稿のカットも黒崎画。「藤沢民俗写真集」表紙より）



黒崎義介 絵と文「ふじさわのむかしばなし」第3集（1979年刊）

竜か？蛇か？

さて、「雨乞い竜」か、「雨乞い蛇」か、出典の表記のままに紹介して来たが、岸田劉生、高木和男、黒崎義介、鶴沼を語る会は「竜」と書き、内藤千代子、田中宣一、民俗写真集は「蛇」という。

耳があり、ツノを生やし、棕櫚の葉は眉、ひげ、たて髪とすれば、竜かと思われるが、四肢がないから蛇行するし、蛙を喰おうと襲うとなれば蛇かも知れない。

つまり形状は竜に似ていて、生態は蛇に似ているのである。全国の雨乞いでも竜と蛇が混在しているが、一ヶ所で竜と蛇とが混同されている例は珍しい。

東屋で「今に雨が降るぞ、といったら大雨になった」と書いたのは龍之介だ。

旧制愛知一中の校歌は明治37年に作られた。その歌詞は「山には虎狼群がりて 陸には竜蛇わだかまり…」で始まる。作詞者は、「マラソン校長」の異名をとった日比野寛である。また、埼玉県鶴ヶ島市脚折の雨乞い行事は、長さ36m、重さ3トンの巨大な「竜蛇」が祭られるという。広辞苑には「竜蛇」という熟語はないが、竜と蛇（とくに大蛇）とは「似たようなものだ」ととらえて、あまり詮索しないことにしよう。

（おかだ てつあき）

「鵠沼とわたし」

綿谷 克延（会員）

小生が社会人となり、鵠沼という地名を意識し始めたのは石原慎太郎原作、長門裕之・南田洋子主演の映画「太陽の季節」を観たことから湘南鵠沼の地名を知り得たかと思う。

湘南を代表する江の島桟橋を挟んで片瀬東浜、片瀬西浜に分けられ、東は、腰越、七里ガ浜、由比ガ浜、西は鵠沼海岸、辻堂海岸、茅ヶ崎と海岸沿いに連なる景観、そこから眺める秀麗富士を仰ぎ見る風景は自画自賛。

その湘南海岸の中心位置に在する鵠沼は明治大正を代表する多くの文人を魅了し、別荘保養地として展けて来た。明治時代には御用邸の候補地にも挙げられたとかで、別荘地の開発がすすめられ周辺には東屋などの旅館も建てられた。そこには斉藤緑雨や武者小路実篤、与謝野夫妻、久米正雄をはじめ多くの作家が逗留し創作活動に取り組み、作品を残している。

大別荘の持ち主は華族、財閥が多くを占め、その家族子弟の避暑の用に、また結核療養の用に供された。労働に無縁のこれらの階層には虚弱体質のものが多く結核の罹患率が高かったのである。

結核療養に海辺のオゾンがいいといわれ、湘南海岸沿いに結核病院が相次いで開業すると、夏場の避暑客のみでなく、結核患者の療養の場として、多くの貸別荘を経営する者が現れた。結果、人口増加し町として発展する基盤となった。

芥川龍之介や岸田劉生は、この貸別荘組である。

戦中戦後は、疎開のまま居付いたり、都会の本宅を空襲で失った別荘族が永住し始め別荘地帯は高級邸宅地に変貌していったと聞いている。

今から 3,40 年も前。現役時代に都内病院のドクターで鵠沼に住んでいる人がいて、何度か届け物をしに夜間うかがったことがある。車でお宅を探して回るのだ

コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク

が、竹垣や石垣、門構えが立派な割には街灯が少なく、苦勞した覚えがある。鵜沼の邸町は鬱蒼とした木立に囲まれ、しんと静まりかえっている。とても凡人の住めるところではないと痛感した。

今年の正月のこと、自転車で友人宅を訪れる途中、鵜沼邸宅地を通りかかり、とある邸宅から琴の音が聞こえ、朗々と謡う謡曲が流れて来た。思わず自転車を止めて、これぞ鵜沼の地名にふさわしいと、しばし聴き惚れた。

縁あって転居結婚、いま私の住んでいる所は、同じ鵜沼でも高級邸宅地の色濃く残る環境の場所とは、遠く離れて居りますものの

「お住いは？」と訊かれ

「藤沢、鵜沼です。」と答えると、恰も邸宅地に住んでいると思うのか

「一等地ですね。」と言葉が返ってくる。

そういう時は言葉少なく、ただ

「え。」とのみ答えることにしている。

ところで昨今の鵜沼の変貌ぶりは何と表現していいか。時の流れと共に旧知の保養療養地、然るに非ずで世相の移り変わりに当初の自然林は極めて少なくなり、田畑も開発されて出来た住宅、マンションに遮られ江の島の花火も音だけが届く。

一方、高級邸宅地も相続が発生すると庭の樹木を全部切り倒し、建売住宅が林立する、これぞ鵜沼という場所はどんどん失われてゆく始末だ。

私が越して来た当座はよく聞こえた潮騒の響きを聞くのも稀になった。

しかしながら、暖冬涼夏快適な気候と、白砂青松、秀麗富士のある限り、鵜沼の評価はそうそう落ちはしまいと思っている。

鵜沼の一隅に居を構えて 50 有余年。今や鵜沼は私の安住の地であり、終の棲家である。
(わたや よしのぶ)

Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break

望 郷

今井 達夫

1

洋画家の笹屋和男は秋晴れの或る日、突然未知の人宇部老人の訪問をうけた。突然とはいっても電話でいんぎんな都合の問い合わせがあり、用件が村山老についてというので、喜んで道順などを教えた上である。

笹屋の住居はアトリエとともに小田急の鉄道を遠望する多摩川べりにあり、都心から電話をかけてよこした宇部老人がすぐ出かけて来ても1時間半はかかるから、笹屋は雑木林を取り入れた庭へ下り、村山老の回顧にふけた。すでにはるか遠い昔のことである。それについては、笹屋の幼少年時代を説明しておく必要がある。

笹屋は横浜生まれで、当時彼の家は生糸問屋をいとなんでいた。彼が生まれたのは日露戦争のはじまった明治時代で、国内は戦勝気分で浮き立っていた。余談にわたれば、幼年の笹屋がはじめて覚えた言葉は「バンザイ」という叫びだったという。もちろん、はじめてとは誇張であろう。村山老はそのころ店の若い番頭の一人であった。

村山老、——そのころは老ではなく、村山録二郎という青年番頭で、笹屋の母の実家と五代か六代前の縁続きだそうだが、横浜の笹屋商店につとめたのは、そういう縁故関係ではなく、多少引っかけりがあるとすれば母の実家と同じ町出身ということぐらいだろう。番頭だから録どんではなくて、録さんと呼ばれていた。

今後は録さんと呼ぶことにしよう。録さんは当時独身でほかの独身番頭や小僧連とともに、寝泊まりは店でやっていた。若いころから無類の酒豪で、いくら飲んでも乱れるほど酔うことはなかったそうだ。酒の話のついでに食事にふれておこう。店にも勝手があって中婆さんがあずかっていたが、どういうわけか三度の食事は仕出し屋から弁当を取っていた。録さんはなかなか辛抱づよい方だが、弁当に不満をおぼえた時いたずらをやらかしたそうだ。そら豆の季節だったから、昼が長く夕食のあと退屈だったせいかもしれない。食べかすのそら豆の袋をひとつひとつ丁寧にふくらませ、さも中身があるかのごとく見せかけて仕出し屋へ返した。仕出し屋では中身があるものと誤解し、翌日それをよそへ回して大目玉を喰ったとのことだが、真偽のほどはわからない。ただひどく印象的な話で、笹屋

の記憶に今でも残っている。

住居のあった今の野毛山公園付近から本町の店までは大して遠くなかったので笹屋は婆やおぶわれたり歩けるようになると手を引かれたりしつつ、よく遊びに行った。そんなとき幾人かいる番頭たちのなかで、いちばん可愛がってくれるのはその録さんであった。遠縁ともいえないほどだがやはり縁つづきを意識していたのかも知れない。

笹屋の方でも、そんな縁つづきなどということは知らない幼児だったのに、やはりひとりでに親しみをかんじるようになった。

「電話のかけ方を教えてあげましょう。」

そういつて彼を抱き上げ壁に取り付けてある電話口に向かわせ、ハンドルをまわさせ番号をいうと一尺と離れていないとなりの電話のベルが鳴った。それに出た別の番頭と電線を通して話し合ったのだが、笹屋のはじめての経験だった。そうかと思うと、店の奥の倉庫へつれていって、生糸をつめた箱をみせたり、どういうわけでそこにあったのか全国からあつまるその箱に貼る幾色かで印刷したレッテルをくれたりしたのも録さんであった。

煉瓦造り三階建ての倉庫は各階ともひろく薄暗く、ひんやりと空気が沈んで幼児を気味わるがらせたが、そういうとき録さんは心づよくたのもしい存在だった。

生糸の箱を梱と呼ぶが、問屋としての笹屋商店は一日に百梱出るか入るかすれば店員一同にうなぎ井をふるまったという。どれくらい歩合をとるのか知らないがそのころ一梱千円近い相場だったようだ。小さな店ではなかった。録さんがたのもしがられるのは幼児からのみではなかったから、そのまま店が成長し録さんの地位が向上すれば、宇部老人が笹屋に逢いに来るような未来は存在しなかったに違いない。宇部老人はポリネシアに対する関心が深く、村山老の消息を求めるのもそれと関連しているのであった。

ところが、笹屋商店の戦勝景気は長くつづかなかった。明治 40 年代に入って間もなく戦後パニックの徴候があらわれ、商店は苦境におちいった。経済上の経緯を延べる要はないが、日本資本主義は機会をとらえて飛躍を志し、そのため笹屋商店のような個人的同族会社の抵抗も妥協も許さなかった。以前には差しのべていた援助の手などはいまもなく消失した。その上、笹屋一家は商人としての度胸と根性を欠き、とことんまでの勝負をさけ傷の浅いことのみを願ったのである。つまり、郷里の財産を保全するため閉店したのであった。同族会社といったが、長兄を主宰者とする笹屋の父親たち兄弟のうち次兄が没し、長兄の次男が

没して、陣容が崩壊したのであった。店員たちは四散し、債権者たちと折衝する整理事務所を設けるころには、すでに大正時代に入っていた。

今までと比較にならぬささやかな整理事務所には、一人の番頭と小僧の一人が残った。そして、貧乏くじともいうべきその番頭が録さんだったのである。いや、当人は貧乏くじとは必ずしも考えなかったかも知れない。なぜならそのポストを自ら志願したのだから。そして整理事務所は、一応の目鼻がつくまで数年間存続した。

2

あとになって笹屋が気づいたのは、録さんがわざわざそんな貧乏くじを選んだ理由が、外国商館などを相手に立ちまわる俊敏な性格を持ち合わせていない自覚であったろうということである。とすれば、笹屋商店が店を閉じなくても録さんは性格にしたがった前途を持ったかも知れない。東北生まれで店に入るまでは東北育ち、それに加えて生得の性格がスロウテンポだったのだから、ほかの商店に転身を望まなかったのかも知れない。スロウテンポについてはこんな話がある。

店を閉じ主宰者の父の長兄が東北の郷里へ引き込むのと前後して、笹屋の父は療養生活のため横浜から湘南の海岸へ転地をした。家族もろとも居を移したのである。そして一年足らずで死んだから、その間の話なのだが、整理事務所に住んでいる録さんはたびたび見舞報告をかねて遊びに来た。そんな貧乏くじを引いたのだし母と同じ町の出身で前に述べたような遠縁関係だし、笹屋の家で歓待したのはいうまでもなかった。彼を歓待する最大の方法は豪酒をほしいままにさせることであった。それはたぶん土曜日だったろう。録さんが泊っていったのだから。

夕方から飲み始めた録さんをもてなしたのは一家総出であった。しかし、豪酒ではあっても飲み方がスロウテンポの録さんにいつまでもつきあっているわけにいかず、一人去り二人去り、しまいには笹屋が生まれた時からずっとつとめていた婆やだけになった。この婆やも母や録さんと同じ町から来ていたから、話し相手としてはいちばん適任者なのであった。

その婆やが話したのだ。夕方が夜になり、次第にふけて来ると、録さんは自身で開け放した縁側に膳を持ち出し、おおむねは手酌でちびりちびりやり続けた。

療養中の父はもちろん早く床についてしまったし、母も笹屋も幼い妹も眠ってしまい、酒宴はふたりきりでつづいたのだが、——いや、ふたりいた女中も敬遠したのはもちろんだが、もう一人相手をするのがいた。それは笹屋の数多いこの一人で、婚期を逸したため笹屋の家に寄寓していた従姉である。彼女は生ま

れつき勝気なたちで、縁談を片っ端から蹴った明治末年としては稀有な性格の持ち主だった。やはり東北の生まれそだちだから、話題もあるし同情的だったかも知れない。が、彼女もいつ果てるとわからない酒席に閉口して引きさがってしまったあとのことだ。

録さんが膳を縁側へ移したのは月が登りはじめた頃だったが、その月が中天高くかかっていたというから、随分時間がたったのだろう。朝早い婆やが相手になりながら居眠りをはじめると録さんがこういった。

「ばあや、見てごらん。いい月だなあ。」

おっとりしたもので、褒め言葉を使うなら悠揚迫らざるものがあつたと称さなければなるまい。なぜこの晩のことを長々と説明したかといえ、録さんの性格描写のためには違いないが、ずっと後での情景と照合したいからである。

父の死とともに笹屋の家の生活は当然縮小し、従姉と一人の女中が郷里へ帰った。録さんは遊びに来ることを遠慮したとみえ、事務的な用件以外では訪ねて来なかったから、笹屋の記憶に残るような情景は見られなかった。そして——いや、録さんが小僧相手に自炊していた整理事務所へ、小学校6年生のとき笹屋は一度行ったことがある。それは本牧に近い崖下のしもた家で四部屋ほどの家の座敷ともいべき部屋に、帳場格子を据え帳簿が並べてあつたが、もちろん本町の店の帳簿などと比べようもなく、しかも、ひどく日当たりの悪かった印象が残っている。そこでの自炊生活はつつましかで、あるときは幾日かごま塩だけが副食物という話を聞いたことがある。が、この話は真偽のほどはわからない。むしろ、おもしろい話としてつたわっている、暗い印象ではなかった。それにしてもそんな伝説が残るくらいだから、不如意な日常生活にちがいがなかったが、録さんは苦情をいわずにやり通した。好きな酒がどの程度に飲めたか聞きそこなつたのは心残りだ。

録さんの進路に意外な発展をもたらしたのは、第一次世界大戦だった、——といっても決して大げさではない。日本はそれまでドイツの植民地だった南洋のパラオ島地域を委任統治することになると、整理事務所の閉鎖と同時にパラオに渡ったのである。録さんはまずパラオ島コロール村に居をさだめ、周辺の無人島を七つ日本政府からもらい受け、真珠の養殖事業をはじめた。それは突然の飛躍だが、録さんの胸中にその計画が宿つたのは、いつごろで、どういうきっかけからか詳らかにしないのを、笹屋は残念に思っている。周辺の七つの無人島といっても、それらは太平洋にちらばり、一巡するのに一週間かかるほどの距離を持って

いた。彼は海に放った真珠貝の成長を調査するため、時期を定めて数回カヌーをあやつったが、パラオから遠く離れた無人島で一夜を明かす時、どんな感懐が胸中に捉曳したものであろうか。青い月に照らし出された珊瑚礁で啼く人魚の声を聞くこともしばしばあった。人魚とは俗称で動物学的に言えばジュゴンだが、それは人間の幼児の泣き声に酷似していて、ともすれば錯覚を呼ぶほどであった。

真珠貝が成長し、真珠を採取できるまでには数年の月日を要する。いかにもスロウテンポの録さんらしい着眼だが、澄み切った海中の真珠貝はどんなにか彼に期待をかけさせたことか。貝は順調に成長し、試みに採取した貝の内部には真珠もまた順調に成長していた。このままで進めば、録さんは南海の真珠王という王冠を頭上に輝かせたかも知れない。が、個人ではこれ以上事業をまかないきれないのを悟って、熟練した労働力を所有している日本の真珠王に一切の権利を譲ったのである。賢明な結論というべきであった。

そして、次に録さんは玳瑁^{たいまい}の養殖に転じた。亀甲の原料である。録さんが故国を訪れたのは、玳瑁養殖に転じて三年目の秋であった。

3

そのころ、——というのは関東震災の前年だが、笹屋の父の長兄は横浜郊外に隠宅を設け、東北の郷里と往来していた。横浜港に下船した録さんが旧主人宅へまっすぐめざしたのはいうまでもなかった。錦を飾るとまでは行かないにしても、玳瑁養殖の目鼻がついたところで話を聞いてもらいたい随一の人物は旧主人だったのである。眼鼻の着いた証拠に三年目の玳瑁の剥製を土産に持参したことでも、彼の気持ちは推察できよう。ほかに白珊瑚を竹の形に作ったステッキも、珍品だった。

人魚の話もこの時の土産話のひとつだが、久しぶりに飲む日本酒の味わいはことのほか彼を喜ばせた。

「日本酒も内地から来ますが、赤道を越すとどうしても味が変わります。現地で作った酒をもつばら用いております。いや、簡単なものでしてな。椰子の幹に傷をつけて汁をとって自然発酵させるだけです。うまいとは申せませんな。」

以前からそうであったが、録さんのしゃべり方はますますスロウテンポになっていた。

録さんはそこに三晩泊って郷里訪問に立って行っただが、その間あまり旧友たちを訪ねるでもなく、湘南の海岸町の笹屋の家に一度来たのが唯一の遠出であった。

笹屋はすでにティーンエイジャーの私大予科生になっていたが、まもなく画業

を選んで中途退学したくらいだから、翌日は喜んで学校を休み、江ノ島やら鎌倉やらと見物につれてまわり、横浜の伯父宅へ送り届けて彼と一泊した。録さんとたっぷり一日一緒に時間を過ごしたのは、この日だけしかない笹屋である。

江ノ島など、格別彼の関心をひかなかった。もっと広々と広がっている海やまるで規模のちがう岩礁なんか見たって仕方のない碌さんだったろう。鎌倉に対しても同様で、歴史には興味がないと見てとった笹屋は、ただひとつ目を吸われたらしい建長、円覚の杉木立の見える掛茶屋よりちょっとましな店で酒をすすめた。

その酒席で笹屋はこんど顔を合わせて以来訝しくかんじていた質問を向けた。録さんは南方からやってきた人物らしくヘルメットをかぶっていたが、南方の激しい光線の下で何年かすごして来たとは思われない顔の色についてだ。

「いや、向こうでは椰子の葉で作った帽子をかぶっているのですね、日に焼けないんですよ。」

「しかし、暑いでしょう？ 土人は裸で暮らしていると思うけれど、碌さんはどうなんです？」

「私だって最初は裸で毎日暮らしていたんですが、島の役人から文句が出てね。土人と同じ裸でそとを歩き回っては日本人の威厳に関わるという文句でね。」

「じゃ、洋服？ ゆかた？」

「それが肌襦袢ですよ。なんといったかな。縫い目が糸ですいている。」

「じんべえ？ 海水浴なんかに着て行く？」

「そうそう。それですよ。それを着ればいいことになった。」

「おもしろそうだな。僕も行ってみたいな。」

「いらっしゃい。ぜひ、いらっしゃい。冬の休みにでも。」

録さんは熱心にすすめたが、乗り気だった笹屋もとうとう機会を逸してパラオには渡らなかった。青い海と珊瑚礁、ゴオギャンを思い浮かべていた笹屋にとって、今にしても残念に悔いることである。その晩、伯父の家で枕をならべて寝て、笹屋はそのほかいろいろな話を聞いたが、翌日彼は学校に行き、その晩の汽車で上野をたった碌さんとはそれきり逢うことはなかった。録さんは郷里にひと月近く滞在し、あちこちと親せきを回ったそうだが、その間の消息はほとんど聞くことがなかった。

4

パラオへ帰った録さんの玳瑁養殖事業は、翌年とんでもない不幸に見舞われた。南洋未曾有の大暴風におそわれ、飼育していた玳瑁が全部流されてしまったの

である。録さんの失望はいうまでもなかった。しかし、録さんには支えができていた。内地から帰っていった間もなく、現地人と結婚していたのだ。パラオの大酋長の孫娘、酋長の娘をもらってくれとかねてから懇望されていたのである。

——懇望拒みがたく、こちらにいるあいだだけでもかまわないとの条件を聞けば拒み続ける理由を見出せず、云々。

という手紙は笹屋の伯父を驚かせたが、すでに四十歳を越えていた録さんのためには祝福を送っていい出来事であった。笹屋の伯父からその手紙とともに結婚記念の一族そろって撮影した写真を見せられた。一族の老若男女のほかに、日本人としては録さんひとり、椰子の林と青空を背景にして三十人ほど整列しているが、白服を着ヘルメットをかぶった新郎以外は、着飾った新婦をのぞいてみんな半裸姿である。しかし、笹屋の目を引いたのは、大酋長と酋長の立派に整っている顔立ちだった。頬骨の高いモンゴリヤ系の録さんとはくらべものにならなかった。

それと比較して女性のほうは鼻も低く典型的なパラオ原住民の容貌の持ち主たちで、新婦もまた例外ではなかった。が、ともあれ勢力ある大酋長一家の結婚式の盛大な情景を想像させるに十分な記念写真であった。写真はいわゆる写真屋の撮ったそれで、日本人の写真屋が営業していることを笹屋は知った。つまり、南洋未曾有の大暴風に養殖玳瑁をねこそぎやられたときは、こういう支えを録さんは持っていたのだ。もはや録さんは孤独ではなかった。七つの無人島をカヌーで巡回していたころの孤独は消え去ったのである。七つの無人島を泊まり歩き、青い月を眺め、人魚の歌を聞いた夜の故国を懐かしむ感懷もまたこれで失った録さんの胸中を思いやった笹屋は、あるいは思いすごしをしたのかも知れない。この意味は、この災厄によって録さんは海の幸を求めることをやめ、山の幸とはいいにくい地上の幸を求めて椰子の栽培に転向したことである。

椰子の実からコブラという油を採取すべく、椰子の若木の植林をはじめたのであった。といっても、彼のスロウテンポはここでも作用して何年かの歳月ののち立ち上がったのであるが。

だが、この事業にも災厄が待っていて、若木がようやく育ち出したころ、またしても南洋未曾有の大暴風がおそいかかり、椰子の木を全部なぎ倒し去ったのである。録さんからしばらくのち報告の書簡が来、それを見た伯父や笹屋は大いに笑ったが、その通り書いてあったのだから、つづけざまの南洋未曾有の大暴風はうそではなかったろう。が、災厄は災厄だ。録さんのために同情は惜しまなかったが、笑うことができたのは録さんが事業をあきらめ、パラオ州庁に役人として

勤め始めたという報告が書き添えてあったからである。伯父はこう感想を述べた。

「役人として務まるかどうかわからぬが、かえっていいかも知れない。」

しかし、笹屋にいちばん関心を抱かせたのは、さらに書き添えてあった男子誕生母子ともに健全というのにつづいて、

——長男はカズオと命名、元気に笑っております。

という一節であった。

「カズオとは驚いたな。」

「いや、あれは君を小さい時分から可愛がっていたからであろうな。」

伯父は面白そうに笑ったが、笹屋和男としては、得体のしれない薄気味悪いショックを受けたのを隠すことができなかった。伯父は録さんと血のつながりはないが、笹屋とすれば遠縁といえないくらい遠い間柄にしても、どこかで血縁はあるはずだ。男子出生、ポリネシアとの混血児でカズオなる赤ん坊が元気に笑っているとは、どうもむずがゆい話である。家に帰って母に報告すると、母も奇妙な笑いを浮かべた。

「とにかく、ぼくは録さんの家とのつづき具合を調べてみよう。」

母の実家は東北の町の家を留守番にまかせ、一家全部東京に出ている。笹屋はその留守番に手紙を書き、調査してくれるようたのんだ。

調査は大分時日を要したが、田舎の人らしい丹念な調べ方で、いろいろなことが分かった。まさしく五代か六代前に笹屋の母の実家の方が分家している。武士であったのか苗字帯刀の家柄か、村山録兵衛なる人物がいて、これがひどく背丈が低く、三尺録兵衛というあだ名がついていた。この三尺録兵衛は豪胆で腕もあり、町に近い山にある沼に住み人畜に害をなした大蛇を退治に出かけみごと討ち果たしたとの伝説がのこっている。大蛇とはおそらく山賊の意かと報告書の書き手の注釈がついていて、山上にはその徳をたたえる古びた碑が残っているとも書いてあった。分家はこの三尺録兵衛の前後らしいと、過去帳を引っくりかえした寺の住職の見解も記してあった。とうとう、パラオの大酋長と笹屋は縁つづきになったわけである…。

その後数年間、録さんの消息に接しなかったのは、伯父が郷里へ帰ったり笹屋がヨーロッパへ勉強に出かけたりしたためだったが、シナ事変がはじまって間もないころ、思いがけない話を聞いた。伯父が郷里へ帰ったあとに住んでいる従兄のところへ、録さんの娘が訪ねてきたというのである。従兄は笹屋より随分年長で、横浜の店がつぶれる前後大学生だったから、同年輩の録さんとは遊び仲間で

あった。それで頼ってきたのだろう。十六歳になったその娘は、東京の洋裁学校で勉強する目的で単身父の故国へ出てきたのである。横浜へ行ったついでに寄った従兄の家でそれを聞いた笹屋は興味をそそられた。パラオ島コロール村——そのころはすでにコロール街と呼ばれるほど発展していたにせよ、はるか南の島からやって来た娘のけなげな勇気を買ったのである。

笹屋は、従兄の家で酒をくみかわしながら、彼女についていろいろと聞いた。現地の日本人小学校を出ているから、日本語を日本人と同様しゃべれるし、話の模様ではなかなか快活な娘らしい。すでに洋裁学校にはいり寄宿舎生活でも不自由ないばかりか、人気者のひとりになっているとのことである。容貌も笹屋が気づかうほどでなく、あの結婚記念写真で見た大曾長や父親の曾長のととのった顔立ちをうけついでいるようだ。

「色はどうかしらん。」

笹屋はユーレシアンを娘を思いうかべた。がこれは意外で黒光りするほど黒く「黒い靴下をはいているけれど、膝小僧に手をおくと、手がそのなかに吸い込まれたみたいにみえるの。」

従兄の細君は大げさに表情をつくった。

「それで好きなのは銀座を歩くことと洋食を食べることだって。得意なのは駆けっこで、ビール瓶を頭に乗せて走る選手権を持っているって自慢していたわ。」

従兄の細君は笑ったが、笹屋の目は全身バネのように敏捷な娘を描いた。笹屋にはもう一つの関心があった。彼と同名の兄貴のことだが、娘は兄想いというよりむしろ崇拜していて、とっても優秀な青年だとのことだ。もっとも、具体的な例は聞けなかったが、笹屋としてはそういう青年であることに満足した。

「そういえば、尊敬する兄貴と同じ名前の君にも会いたいといっていたぜ。録さんはいろいろと話して聞かせているらしい。相当な事情通だ、あの娘は。君の住所を覚えておいた。」

「どんな名前を付けたのだろう、娘に。」

だが、笹屋のかすかな期待は裏切られて、どこにも思い当たらない花江という平凡な名前の娘は持ち主だった。

5

笹屋は花江に逢うのを楽しみにしていたが、それは実現しなかった。急にそういう話が持ち上がって、イタリアへ行くことが決まったからである。そのころのイタリアは、——いや、当時の国情や笹屋の動静はこの場合別問題だ。省略しよ

う。しかし、イタリア滞在は予定よりはるかに長期間にわたり、帰国したときはすでにパラオへ花江が帰ってしまったあとであった。そして、その後はまた録さんの消息にふれる機会から遠ざかったのである。

もちろん、彼のことを知りたければ手紙を出してもいいし、ほかにも方法はあったはずだが、あえて求めなかったのは、録さんに対してやや失望していたからである。笹屋個人については紹介する要はないが、画業三十年いまだにロマン派のニュアンスのキャンバスに捉曳している彼の性格が、パラオで役人になってしまった録さんの後半生に飽き足らなく感じさせたのだ。横浜の生糸問屋の番頭からパラオへ渡った飛躍、七つの無人島をカヌーで巡回し青い珊瑚礁を前にして人魚の啼き声に耳をすました孤独の境地、誇張であるにせよ南洋未曾有の大暴風に二度まで見舞われた災厄、大曾長の孫と結婚した運命の変転、それらに対して関心をそそられていた反動として、平穩無事な役人生活にはまりこんだ録さんを、見損なったというような距離感を持って見た笹屋だったのである。もう一奮発してもらいたかったと求めるのは酷かも知れないとも考えたりしたが、やはり、あきたりなさは消し去ることが出来なかった。少なくとも、笹屋の中のロマン派にとっては、大きな不満だったので。……

笹屋の回想はここで中断された。宇部老の来訪を家人が告げに来たのである。雑木林のなかに腰をおろしていた笹屋は立って、宇部老を迎えるため玄関へ出た。宇部老はほかの用件で四国から出京したのだが、半年ほど前、村山老について書いた笹屋の小文を新聞紙上で読んだので、これを機会にさらに消息を求めるべく笹屋の訪問を思い立ったとのことである。日焼けのした実直そうな老人で、ずっと以前船に乗っていた名残をとどめている。突然の訪問をひどく恐縮していたが、そういうことについてのぐくぐくしいやりとりは省略することにしよう。

宇部老と録さんとの関係は、戦前もはるか前宇部老の乗り組んでいた貨物船がパラオに寄航した際、積み荷の関係で幾日か停泊することになったため生じた。録さんは役所でそういう係をやっていたので、ちょっとしたトラブルがあったおかげでふたりはかえって肝胆相照らす仲になった。毎夜録さんの家に招じられた宇部老はたがいに酒好きだったため、夜を徹して飲みあかした夜さえあったという。さすが大曾長の孫娘の婿だけあって、パラオを中心とするその周辺の地理風俗については深い知識を持っていた。たとえば、こんな話があった。満二十五歳の誕生日が満月の晩にあたる幸運に恵まれた男女は、いさぎよく投身自殺をすれば再び生まれかわる特権が与えられるという伝説だ。

「まあ、めったにそんな符合を与えられる者はいないし、生まれ変わったところで自覚があるわけではないのでね。しかし、もし僕がそういう幸運に恵まれたら、躊躇しないでためしてみたんだが、生憎こっちへ来た時はもう二十五歳を過ぎていましたよ。」

録さんはそういつて笑った。そのことだけが因になったわけではなく、録さんの話を聞いているうちに宇部老はすっかりポリネシアに興味を抱き、以来資料を集め研究に打ちこんだというのである。しかし、残念なことにその後パラオに寄航する機会に恵まれず、戦争にはいると録さんとの連絡も途絶えてしまった。それが笹屋の小文によって録さんが送還されたことを知ったのだ。話は前後するが、顔を合わせるなり録さんの消息を求めた宇部老に対して、笹屋は気の毒な思いをしながら答えた。

「あの人は三年ほど前に亡くなったそうですよ。郷里でね。僕の随筆を読んだあの町のひとが教えてきてくれました。」

宇部老は大変失望落胆した。それほど録さんの消息を熱心に求めていたのだ。

ついでに断わっておくが、宇部老が訪ねて来たのは昭和三十三年のことである。「そうでしたか。残念なことをしました。わたしが怠けていたのがいけなかったのです。もっと早く熱心にならなければいけませんでした。ご冥福を祈ります。」

宇部老は目を閉じしばらく黙祷をささげてから

「——惜しいかたを亡くしました。懐かしいかたです。それにしても、役人ばなれのした豪快な日本男子でしたな。俗吏どもはあのかたの前に出るとちりちりしていました。」

座がしめって来たので笹屋は家人に酒を命じ思い出す限りの録さんの生涯について伝えた。笹屋にとっては、宇部老の口にした役人離れした豪快な日本男子という言葉が、喜びをあたえてくれ録さんに対する追悼の辞として大きな満足であった。孤独、独立を放棄して役人になってしまったことに対して覚えた不満の消え去る思いをしたのである。この言葉を聞いただけでも宇部老の来訪は笹屋に大きな土産をくれたことになるが、酒がまわって来たころ彼が声を低めて発した質問は、僕の録さんに対する関心をさらに深めた。

「実は、こんなことを申すのはどうかと思われませんが、あのかたがパラオへ渡る前、内地で好きな婦人がおられたのではないのでしょうか。具体的な事情は全然申されませんでした。たしかお名前をおひささんとかおっしゃる、——」

その名前を聞いたとたん、僕のなかを電流のように走りすぎるものがあつた。

しかし、軽々しく感想を述べるのをはばかり
「さあ、そのころ僕は小学生でしたから、そういうことはどうも。」
「あ、そうでしたな。これは、どうも。」

6

宇部老は恐縮して話題を転じたが、笹屋が東北地方へスケッチ旅行に出る計画はこのとき胸中に涌いたのであった。旬日ののち、笹屋はスケッチ箱を肩にして上野駅から汽車に乗った。日が経つに従ってもっと宇部老からおひささんの話をしたときの録さんについて聞いておけばよかったと悔いる気持ちがつのったが、——いや、もう少しは聞いていたのである。どうしてそんな女性の名前が録さんの口から出たのかとさりげなく訊くと、酔余それぞれの郷里の唄をうたったとき、宇部老は土佐節を、録さんは庄内おぼこをあまり上手とはいえない節回しでうたったが、
「どうもうまいかないな。もっとよく習っておけばよかった。教えてくれたのは——」

と、そのときおひささんの名前が出たのだという。

いうまでもなく、笹屋の東北旅行の主たる目的はおひささん訪問であった。また、これも今さら断るまでもないことだが、おひささんとは笹屋の父の死ぬころ彼の家に寄寓していた従姉の名前である。おひささんはあの後、縁あって旧家の主人で実業家のところへかたずいたが、なかなかのやり手だと噂に聞いたその良人の、そういったところがおひささんの気に入ったのであろう。

着いたのが早朝だったので、笹屋は急行停車駅から近郊の温泉場へ車を走らせ、旅館でひと眠りしたのちおひささんの家へ電話をかけて都合を聞いた。そして、それから一時間ほどのち車を四十分ほど走らせて、おひささんの家を訪ねた。おひささんの家は旧家らしく大きな構えで、案内を乞うまでもなく出迎えた家人の案内で邸内の静かな一隅にある隠居所に連れて行かれた。すぐわかったことだが、おひささんの主人は兩三年前没し、彼女は日当たりのいい別棟の隠居所で余生を送っていたのである。笹屋の亡父の兄弟は多く、いとこが五十人近くいるので、そのいとこの家の消息までは手が届かない。おひささんと逢うのも亡父の長兄の葬儀に集まったとき以来だから、二十年足らず昔のことになる。

「よく訪ねてくれましたこと。どうぞゆつくりと泊って行って下さいよ。」

この地方の習慣として、客を厚遇するのが目立つ。

「どうも、すっかり御無沙汰をしました。お丈夫で何より。」

そんな挨拶をかわしながら観察すると、はるか昔の勝気な容貌はすっかりおさまって、二十年前とも違うおだやかなお婆さんになっている。

話しているうちにおひさんが未亡人であることがわかったので、笹屋は気が軽くなった。主人が存命なら録さんの話を持ち出すのは用心しなければならない、昼間の訪問にしたのは主人の不在を狙ったと言っては不届きだが、笹屋としては礼儀を考えたのである。すでに温泉場に宿がとってあるというとおひさんは、残念がったり恨んだりしたが、すぐいいつけて昼間だというのに、酒席を設けてもてなしてくれた。未亡人と分かって気が軽くなったのは事実だが、さてどんな風に話を切り出せばいいのか弱っていた笹屋が、きっかけを庄内おばこに見出したのは酒のまわったせいに違いなかった。といっても、それは暮れるに早い秋の日の夕闇のそろそろあたりを包みはじめてからであった。

「そういえば、先日珍しい人が訪ねてきてましてね。はじめてのひとだけれども、南洋で録さん、覚えているでしょう、店にいた、——あの録さんに昔逢ったひとでね。」

「それはお珍しい。録さんもとうとう亡くなったそうですね。」

「おや、ご存知ですか。」

「ここから十里とは離れていませんよ、録さんのところは。」

「なるほど。それで録さんはそのひとにおばこ節を歌って聞かせたそうですが、おひさんは録さんに教えたことがありますか。録さんがそんなことを言っていたそうですが。」

「まあ、おぼえのいい録さんだこと。でも、歌の方は覚えが悪くてね。ちゃんと歌えたかしらん。」

静かな語気だったが、そのとき、笹屋の相手をしている酒のためばかりとは思えない紅味が臉に浮かんだ。そのときまるで詠えたみたいに十日ほどの月が、東の山の稜線から顔を出した。ちょいと言葉がみつからず口をつぐんでいた笹屋は、それを話題にとりあげた。

「海岸に住んでいた僕の子供のころ、録さんが夜更けまで縁側で飲んでいたので、ばあやが文句をつけたことがありましたよ。飲むのならさっさと飲みなさい、お刺身を早くおあがりなさいってね。」

「おばこを教えたのは、あの晩でしたよ。海へ行ってね。」

「海へ？」

これは笹屋にとって初耳だった。彼の驚いた顔を見て、おひさんはおもしろ

そうに笑いを浮かべた。

「そんなことがあったのですか。ちっとも知らなかった。」

「和男さんは子供だったもの。おとなの世界のことはわからなかったでしょうね。わたしはね、録さんのお嫁さんになるかも知れなかった。ちっとも知らなかったでしょう？」

「そうだったのですか。それで？」

「なんとなく、うやむや。」

おひささんはまたさばさばと笑った。笹屋はもっと理由を訊きたがったが、礼儀を守ってほかのことを訊いた。

「パラオへ行ってから何年目かに、録さんがちょっと帰ってきたことがありますね。あのとき逢いましたか。」

「いいえ、あのときはもうここへ嫁に来ていましたからね。でも、おみやげと結婚祝いを兼ねてといって、白珊瑚の置物を届けてくれました。魚の形に彫った置物をね。まだ、ありますよ。あとで出してきましょう。」

だが、笹屋は結局それを見ないで辞去した。時計を見て時間がたったのに驚き、車と呼んでもらったのである。

笹屋の乗った車がでこぼこの田舎道を走るとき、月はもう中天にかかってすみきっていた。昼間来るときは女の子の帯を並べたみたいに広がっていた山肌の紅葉はくろく沈んでいた。それを見やりながら、笹屋は、随分長時間しゃべったにもかかわらず、話さなかったことがいろいろあるのを顧みていた。

録さんが長男にカズオと命名したことも、娘が洋裁学校へはいるため日本に来たことも話さなかった。もちろん、これは意識して避けたのである。昔の勝気でするどい面影を消失しておだやかな婆さまになったおひささんの抱いている昔の思い出に影を射すまいと願ったのだが、それ以上に意識しておさえたのは、録さんが送還されてきたあと往復した手紙の一節であった。その一節にはこんなことが書いてあった。

——当地は寒くて閉口頓首しています。はやく南へ帰りたい、その日の来るのを待ちこがれています。…

笹屋はこの手紙を書いた時の録さんの心境をあれこれと思いはかった。

今井達夫は偉大な伯父、安達峰一郎の伝記ともいうべき『ハーグに捧ぐ——安達峰一郎とその周辺——』を山形新聞に昭和41年4月1日から6月6日まで連載した。

その冒頭で今井達夫は「はじめにおことわりしておかなければならないのは、これは伝記ではないということである。去年の早春思い立ったときは伝記を考えたのであったが、プランを立てているうちにそれは筆者の任でないと悟り、同時に、まったく別の角度から安達峰一郎という人間を見てみる方がいいとの結論が生まれてきた。任ではないというのは、外交乃至国際司法裁判に関する筆者の無知識のため誤りをおかすであろうことを危惧する意味であり、別の角度とは彼の人間を追求して浮き彫りにしてみたい欲求のそれである。(中略) かりに将来彼の伝記を書く人があった場合、肉付けをする資料になるであろうことがその一つ、また、一個の人間としての安達を描くべく、いささか有利な立場に筆者があることが第二の理由である。筆者の亡母きみが安達の妹であるという条件は彼の近親肉親たちから追憶談を聞く便宜を持つ。そして筆者は人間を書くことを目的とする小説作家だから、安達の個人的な側面を追求する方法に馴れているつもりだからである。」と書いている。

しかし、これは彼の謙遜で、「ハーグに捧ぐ」は代表作「水上瀧太郎」とともに優れた伝記作家の資質を余すところなく発揮した作品と筆者は思うが、残念ながら単行本では出版されていない。昭和44年に『世界の良心 安達峰一郎博士』という本が財団法人安達峰一郎記念館から出版されたが、「ハーグに捧ぐ」はその中に収録されているばかりである。(筆者はそのコピーを所持しているから、読んでみたい方は申し出て下さい。お貸しします)

本題に戻ろう。「ハーグに捧ぐ」の文中、安達峰一郎の母しうの人柄を描写するのにパラオから一時帰国した安達貞二と逢った情景が書かれている。

そこには安達貞二の生い立ちや、どうして南洋パラオ島に行く事になったかについても詳しく紹介されているから、しうの人柄描写以上に安達貞二の人物像がくっきりと表現されているのである。

「しうの好奇心は、もうひとりの訪客の場合にもあらわれた。この訪客は、冒頭の生家訪問の章で登場願った安達四郎氏の次兄安達貞二で、大正十一年、五年ぶりで、南洋パラオ島から帰国した時の訪問である。

彼は若い頃に横浜の今井生糸店(注:今井達夫の父とその兄弟が経営していた)

の店員になり、明治末年同店廃業の頃には帳場主任に昇格していて、そのゆえで同店の残務整理をその後数年間にわたってまかせられた。第一次世界大戦によって、南洋パラオ諸島が日本の委任統治になると、ちょうど残務整理の終了の時期が同時期だったことが彼の大きな転身の機会になった。彼は南洋パラオ島に目をつけ、真珠養殖企業をはじめめる決意を固めたのである。経緯は省略するが、彼は日本政府からパラオ島周辺の七つの無人島の提供を受けることに成功して、かの地に渡って事業を開始した。

ここは彼の事業について語る場ではないが、その真珠養殖を他へゆずったあと、^{ないまい}玳瑁養殖に転じ、さらに椰子樹栽培コブラ油製造を行った後、パラオ島コロール州の役所につとめ、終戦とともに送還、山辺町に住み死去した。

彼が常盤松の家（注：峰一郎の東京の家）を訪^{ないまい}問したのは玳瑁養殖にはいつてからで、しうとの対面の場のため、履歴を略記した次第である。

彼は酒好きで悠揚せまらざる態度の持ち主であつた。したがって、飲み方もゆっくりとテンポがおそく、ぼつりぼつりとしゃべる。彼は筆者の亡父の長兄の隠宅である横浜の家に泊まっていて、その老人と一緒に常盤松を訪ねて来たのだが、午ごろから酒が始まり、パラオ島の土産話はえんえんとつきるところがなかった。

彼は七つの無人島を見てまわるのに、一週間かかるといった。ひとりきりでカヌーを操り、空と海きり見えない海洋を漕いでまわると、島に泊まっているとき月夜などに珊瑚礁で人魚が啼いているのを聞くことがあるといった。人魚とはジュゴンのことであろう。しかし彼の口からぼつりぼつりと語られると、それが伝説中の人魚のように聞こえた。しうはそういう話を熱心に聞いていた。

話題が一転して、島の大曾長が娘と結婚してくれと口説いているが、目下考慮中だというと、しうはたちまち好奇心をそそられたとみえ、どんな娘だとしきりに問いただした。彼はすでに中年男だったが独身だったのである。大曾長は島にいるあいだだけのいわゆる島妻でいいからと、条件を出したという。しうは結婚をすすめもしなかったが、じゅうぶん興味をそそられたらしい。

色はどれくらい黒いのかなどという質問を発したりした。結局彼は大曾長の懇請をいれて結婚し、男と女とふたりの子供をもうけたが、しうはそれを知らずに死んだ。太平洋戦争直前、その娘が日本へ来て洋裁学校で勉強したが、しうが生きていたらきっと逢いたがったろうと思う。その対面の場を想像すると、ひとりでに微笑がうかんで来る。」

◆「望郷」は上記の事実をヒントに創作された。

（おかだ てつあき）

■ 渡部 瞭副会長追悼ページ ■

本年6月23日に召天された当会副会長の渡部 瞭氏を悼んで、「追悼ページ」を設けました。会員から寄せられた追悼文をはじめ会誌『鵠沼』への寄稿リスト、入会経緯など自身が綴った文章も併せて掲載します。

最期の最期まで自分の思いを押し通して召天

7月例会の「芥川龍之介ゆかりの場所めぐり」に出かける前、鵠沼を語る会副会長の渡部瞭氏が精魂を込めて企画プロデュースした『鵠沼の自然』展(2012年6月15日～9月15日 鵠沼郷土資料展示室で開催)を供養の気持を込めて皆で観ました。そして8月例会で改めて、この展示を出展者の解説付で見学しました。



渡部瞭氏は一昨年10月に名古屋で開催されたCOP10に参加された後、体調が優れないことに気づき、検査したところがんが発病していることが分かったのです。それから2年弱、がんと闘ってきましたが、残念ながら6月23日に召天されました。この間、以前にも増し鵠沼を語る会のみならず鵠沼郷土資料展示室などの仕事に精力的に取り組まれてきましたが、6月15日から3ヶ月間、展示室で開催された『鵠沼の自然』の展示プロデュースが最後の仕事となりました。

亡くなる4日前にドクターの「命の保障はない」の忠告を受け止めた上で、プロデュースした展示の様子を確かめに展示室まで来られました。自分の目でしっか



展示内容を確認する渡部 瞭氏

り展示内容を確認し、若干のコメントを残し納得された様子で病院に戻られました。まさに、命と引き換えに自分の思いを押し通した感じでした。渡部瞭氏が亡くなられたことは当会にとって大きな痛手ですが、これまで蓄積されてきた鵠沼に関する膨大な資料を、今後も有効活用させていただくことで故人の思いに報いたいと思います。

渡部 瞭 副会長を悼む

鵠沼を語る会会長 有田 裕一

6月23日、わたしたち鵠沼を語る会の副会長 渡部瞭氏が召天されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

氏は病を発見されてより、2年あまり闘病されたと聞き及んでおりますが、この間一度も病の辛さを口にされたこともなく、最後の最後まで会の重要な役割を全うされました。ですから、この訃報には本当に驚かされました。

氏は教職を退官後、鵠沼を語る会に入会され10年ほどになると思います。郷土史に関する探究心が旺盛で常にパソコンを駆使して成果を上げられました。

会員の皆さんに興味のある研究の発表、会誌の記事、例会時のお話し等、色々な場面で、たくさんの知識の引き出しを持っておられる方でした。そんな氏を失った会の損失は計り知れず大きく、今さらながら、貴重な存在を失ったものと残念でなりません。

藤沢バプテスト教会で行われた告別式には鵠沼を語る会会員も多数参列し、お別れをいたしました。

思えば渡部さんとお話し合いすることはたくさん残っていました。それを察してか、6月19日鵠沼公民館（展示資料室の展示物の修正をするために強引に病院の外出許可を取って車椅子で来られたのでした）で待っておられたのに私の都合でお会いできず、22日も病院で待っていて下さったのだそうです。

それが翌23日11時まえ、かほり夫人から「すぐ来て下さい」との連絡を受け、内藤さんらと急いで大船の湘南鎌倉記念病院へ駆け付けました。

渡部さんは呼吸器を付けたままの状態でしたが、お見舞い申し上げますと私たちが認められたようでした。すこし安心して、やがて病院を後にしたのですが、それが永遠のお別れとなってしまいました。

わずか、その2時間後に訃報を知らされることになったのでした。

キリスト教では、現世は一時のものであり召天した魂は不滅であるといわれるそうです。クリスチャンの渡部さんは天国に召されても、大好きな研究を続けられ、あの大きな空の上から、わが鵠沼を語る会の活動を見守っていて下さることと思います。

早過ぎた召天

鵠沼を語る会会員 岡田 哲明

渡部さんが亡くなったと有田さんから聞いたのは1ヶ月半余の海外旅行から帰った翌日の7月27日のことであつた。逝去は6月23日であつたという。

旅日誌を繰ると、その日はフランスのスペイン国境に近いミディ運河沿いのポアレ村に建つ13～14世紀ゴシック建築の聖エチエンヌ教会を僕は訪れていた。

天井の高い薄暗い聖堂に入ると夏なのに中はひんやりと涼しい。僕は信者ではないが、教会に行くといつもするように1ユーロでローソクを買い、献灯瞑目した。瞭さんの訃報は知る由もなかったが、送靈に参加した事になろうかと、自分自身を慰めている。

それにしても神様、あまりにも早過ぎるお召ではなかったでしょうか？

渡部 瞭さんに捧ぐ

鵠沼を語る会会員・藤沢文化創造の丘をすすめる会会長 熊坂 允子

6月23日、渡部 瞭さんは長い闘病の末、召天されました。

最後の最後まで生涯をかけた夢のための仕事に打ち込み、その実現を次の人々の手にゆだねてゆかれました。

私が6年前に総合ミュージアムをめざして、会を立ち上げた時、瞭さんは既に「なぜ藤沢市には公立博物館、美術館、文学館がないのか」というブログをインターネットに作っておられました。後程それを知った私に瞭さんは、そのすべてをダウンロードして下さいました。

内容は法的根拠、全国との比較、博物館、学芸員、藤沢の文化財などあらゆる角度から調査されており、大変勉強になりました。市民の皆さんにも是非読んで頂きたい所です。

5月8日、鵠沼を語る会で、お会い出来たので話に花が咲きましたが、その時、瞭さんが「夢をみた、藤校の下の方に縄文土器がゴロゴロしていて、少し登ってゆくと中世のものがあつて、そして頂上にはミュージアムがあるんだ。」と話されました。

5月13日、私達の会の総会に奥様のかほりさんと共に車椅子で出席して下さいました。おだやかな笑顔で最後のメッセージを伝えに来て下さったのだと思い

ます。後で大変に消耗されたと、かほりさんから伺いました。

今、私達は瞭さんの意志を受け継ぎ、彼のそして私達の夢を実現させるために進んでゆきます。

瞭さん、天国から応援をお願いします。

瞭さんの期待にそえなくて、ご免なさい

鵠沼を語る会会員 小池 清志

渡部瞭先生とは一緒に職場になったことはないのですが、同業者として顔見知りでした。彼の視聴覚教材を使つての授業は定評がありました。

私は定年後、地元のことを知りたいと思い、「鵠沼を語る会」に入会しました。その頃、渡部瞭さんはホームページ等「語る会」の視聴覚部門を担って大活躍でした。瞭さんから一緒にホームページの仕事をしないかと誘われたのですが、私は大のメカ音痴なので、会に迷惑をかけると思つて、婉曲にお断りしました。その後、地域のボランティア活動や鎌倉ガイド協会の仕事の方が忙しくなり、今では、定例会の出席もままならない状況です。

そのような訳で、渡部瞭先生の期待に応えられなかった自分が情けないと同時に、渡部先生に申し訳ないことをしたと思つています。

どうか天国から「鵠沼を語る会」を見守っていて下さい。

渡部 瞭氏の召天を悼み 思い出を語る

鵠沼を語る会会員 小林 政夫

渡部瞭氏が召天してしまつた。まだ、彼から教えて貰いたい事が沢山残っていたのに。

奥様とは長年のお付き合いだったが、ご主人は書籍等で知るのみであつた。一対一で長時間話し合つたのは我孫子研修の際で、その博識には恐れ入つたのを覚えている。

氏の広範で豊かな見識、ウイットを交えた丁寧な語り口は、温和な表現と共に調査・研究へ確信を示していた。

その後、様々な面でお世話になった。異体字の読み方とネット上での検索法・Powerpoint の効果的な使用法など細かい面でのご教示を頂けた。それに対し何

のお礼も出来ないので、「日本地名索引」のフロッピーディスクを差し上げた処、すぐに「鵠沼を巡る千一話」の第6話「全国に鵠を追う」に活用された。やつと少しお返しが出来たと思う。

平成18年から始まった藤沢市教育センターの「藤沢の自然6」身近な川と水辺の編集には編集長として活躍されたが、野外調査には出られなかったという話を聞いた。

本人は元気に「ふるさと藤沢」の監修の話などして呉れていたのですが、迂闊にもすでに体内各所に腫瘍が転移し病状が進んでいたことを知らなかった。

体調は、自分自身が一番よくわかる。不安や焦りがあった中で、まだ様々な活動を続けられた意志の強さには感服する。

6月の語る会で、元気でねと声をかけたのが最後になるとは……

郷土資料展示室の展示のために病苦を押して最後の最後まで修正されたと奥様から伺った。

なんと言う意志の強さであろうか。

知識・行動力・人格等見習うべきものを多く身に付けたおいしい人物を亡くした。“残念”

ご冥福をお祈りする。

今後ともよろしく

鵠沼を語る会会員 佐藤 和子

穏やかな表情でゆっくりゆっくり歩いていらした渡部さん。多くの知識が蓄積、圧縮され、溢れ出てくる感じでした。地理学を研究されたこともあって、多様な自然環境、そこに展開する人々の歩み、それによって多くの地域性、特色ある事柄が形作られている原点のようなお話を伺う事も出来ました。「鵠沼を語る会」でもそれらのことを度々語られ会誌『鵠沼』にもしっかりとまとめられて貴重な資料となっています。いろいろご指導頂き有難うございました。

旅立たれる2時間ほど前のお姿が目に残り、何と申し上げてよいかわかりませんが奥さまご家族の皆様に見守られて安らかに召天されましたことを想い、これからは彼の地よりの様々な発信をお待ちしています。必ず受け止め、本当に本当に大事にして参ります。

鵠沼地区に興味を持たせてくれた人

鵠沼を語る会会員 佐藤 弘

私の渡部瞭さんとの関わりは、ほんの一寸したことから始まった。

私の家の土地および隣家4～5軒の土地は、昔の道路（現状より狭い巾）との間に、他の人の土地が登記簿上残っていたため、それを調査しようと公民館に出向き郷土資料室を訪ねたことであった。（後日分ったことであるが、他の人とは鵠沼の別荘地開発に関係した山口寅之輔=高瀬家の親戚であった）そこにたまたまいたのが渡部瞭さんであった。色々と話していると、鵠沼を調べるのであれば「鵠沼を語る会に入会しては」と誘われるがままに入会し、今日に至っている。

鵠沼で育っていない私は鵠沼を語ることはできないが、魅力があり、興味をひかれる鵠沼を知ろうと好奇心を持ち続けている。鵠沼の色々な事柄を調べようとインターネットで検索すると渡部瞭さんの調査した資料が色々なサイトに数多く存在している。最近『鵠沼を巡る千一話』を楽しみに知識を増やそうと愛読していたのに・・・

本人からも鵠沼について書きたいことはまだまだいくらでもあると伺っていたが、志半ばで終えざるを得なかったのはさぞ無念であったでしょう。しかし、瞭さんが作成した資料の全貌把握は容易ではないが、正に宝探しみたいに掘り起こし、貴重な財産としてそれらも基にして、今後語り継ぎ伝えて行かねばと思う。

ゆったりとタバコを燻らせていますか

鵠沼を語る会会員 竹内 広弥

9年前の夏、渡部瞭（ナベ）さんから鵠沼を語る会の活動を観に来ないかと誘われ、例会を鵠中の同級生・高田清祐さんとのぞきに行った。ふたりとも鵠中の先輩からの誘いなので、とりあえず様子を観させていただくということであった。

ところが、その場で「今回入会したお二人です」と紹介されてしまった。その年の暮れには、「運営委員をやらなきゃ損だ」といわれ、ふたりとも運営委員会に出ることになった。まんまと、ふたりしてナベさんの手中にはまったわけである。

ナベさんは高校山岳部の先輩でもあり、北アルプスの山々を重いキスリングザックに喘ぎ登った仲である。ナベさんのペンネーム「黒部五郎」は北アルプス・黒部川源流に聳える黒部五郎岳に由来する。この山は東面にカール地形を抱える風

貌で、その位置とあわせユニークな山として知られる。高校生の頃、自分にぴったりのペンネームつけ、以後、黒部五郎の名で押し通してきた。自らのホームページ（HP）「湘南の情報発信基地 黒部五郎の部屋」を立ち上げて、膨大な情報を提供してきた。

ナベさんのユニークな生き方には昔から感心させられることが多かったが、それは鵠沼を語る会の活動においても然りであった。自分の世界をしっかりと創り、自分の好きなように活動してきた。ものごとに対する見方は、ちょっと距離を置いて斜に構えて、が常であったが、自分の興味あることをしゃべりだすと、ナベさんの独断場であった。それにしても研究熱心というか、気になることは驚くばかりの探求心をもって調べまわっていた。病魔が進み、動くことが難しくなってもナベさんの探究心は衰えることはなく、ますます強いものになっていった。

まだまだやりたいことが山ほどあったことは傍で見ていて明白であったが、自然大好き人間のナベさんが渾身の思いを込めて企画・プロデュースした『鵠沼の自然』展が最後のものとなってしまった。この展示は鵠沼の自然に興味を持つ団体、個人に出展を呼びかけ鵠沼郷土資料展示室が開催したもので、ナベさんから『鵠沼近辺の蝶』の展示を担当するよう強く言われた。

鵠沼を語る会のHPもナベさんに負うところが多く、その作り方にはナベさん流が随所に見られ正直、手直しに苦労している。HP担当として最小限のアップデートは行っているが、これからは操作上のことで訊くことが出来なくなってしまった。きっと、あの世で「タケ、ガンバレ」とニヤついていることだろう。

今ごろ、ひと足先に逝った高田清祐さんと召天した先で再会し、二人して最期までやめなかった喫煙を心置きなく楽しんでいることでしょう。

同じ想いで取り組んで来た鵠沼郷土史の思い出

鵠沼を語る会会員・鵠沼郷土資料展示室運営委員会副委員長 内藤 喜嗣
渡部さん、貴方がプロデュースした今回の展示「鵠沼の自然」は無事・盛会にて終了しました。鵠沼郷土資料展示室を代表して御礼申し上げます。ありがとうございました。

2012年9月15日の最終日は、締めくくりに公民館主催講座「くげぬまあそび隊」の子どもたちが二班に分かれ見学。貴方の蓮池の研究に驚きながら、以前に

話を聞いた子も居ましたが、かほり夫人のメダカの展示説明を色々質問するほど熱心に聞いていました。竹内さんに依頼してくれた「鵜沼の蝶」も大人気でした。

今回の展示は、貴方の追悼展示の感が強くなりましたが、メダカの会、藤沢バプテスト教会をはじめ貴方が係わった多くの場から多数ご来室いただきました。

皆様、異口同音に貴方の博識な開示に驚かれ、見学できたことを喜び、これまで共に築いて来た鵜沼郷土資料展示室の存在をお褒めくださいました。これは時々ご同伴いただいた、かほり夫人の「だから前から、楽しいからいらっしやい、と言ったじゃない」の言葉通り、以後、お立ち寄りくださる方がふえました。

渡部さんとのお付き合いを振り返ると、十年ほどの歳月でしたが大好きな鵜沼の歴史・事柄を紐解き後世に伝えるために鵜沼を語る会・鵜沼郷土資料展示室に係わり、互いに第二の人生を育んでくることが出来たこと、なべさん、りょうさんと呼べる仲間として親交が出来たことに感謝し、御礼申し上げます。

渡部さんと最初にお会いしたのは確か、1999(平成 11)年 10 月の公民館まつりの展示会場で、この時の展示は鵜沼を語る会の元会長・塩沢務氏のご遺族から会にご寄贈戴いた鵜沼に関する膨大な資料を公開した「塩沢コレクションから」と記憶しています。このとき、渡部さんは「鵜沼を語る会のことは会員の榛葉昭市氏から聞いているが、こんなに鵜沼の資料が集まっているのですね」と申され、「私は高校の社会の教師をしています。鵜洋・鵜中に出で、鵜沼、藤沢の歴史を調べています。もうすぐ定年になるので、そのときは鵜沼を語る会に入りたい」といわれましたね。それから会の催しには繁げく顔をだされ、2001(平成 13)年 4 月の例会にかほり夫人同伴で出席され、ご自身の執筆・写真、かほりさん編集の藤沢市環境部みどり課発行の藤沢の自然No.26「鵜沼の自然」の小冊子を会員に配られ、入会されたのでした。

以後、博学な知識を存分に発揮して会誌「鵜沼」の編集を担当されました。また、ITに逸早く取り組み、幅広い資料の収集、ウィキペディアに記載された内容の訂正や会のホームページ開設の基を築かれ、自身も「湘南の情報発信基地 黒部五郎の部屋」を開設されておられます。

一方、鵜沼郷土資料展示室は、公民館が増築され鵜沼市民センターと併設になるのを機に当時の市長、山本捷雄氏の後押しで 2003(平成 15)年 12 月に開設され

ましたが、直ちに運営委員になられ活躍の場を広げられました。そして、私が経験、見聞した事象を纏め収蔵したに過ぎない資料を学問的に裏付けされ、広い人脈を通じ多くの資料の発掘、提供をもたらした。この資料展示室の資料充実を図りました。収蔵資料の重要性を謳い、この資料展示室を市民のための学習の場として今日ある姿にできたのも、一重に貴方のお陰です。

近年は、博物館・美術館の無い当市を憂い、市民電子会議に文化施設建設の提言をされたり、ミュージアム建設促進の会への参加をされていました。

教育者のご家庭に生れた渡部さんは父上に倣い、名門の立正大学で地理学を修められ、またご母堂のご指導で古文の分野にも踏み込まれ習得された読解力と大変な博学をもってして、塩沢コレクションの習熟と高校生時代からの生物・自然科学の研究、登山の経験を伸びやかにいかされた場がこの資料展示室だったように感じます。

一昨年10月、病魔に犯されていることを知らされると、これからのこの資料展示室の展示課題のスケジュール・リストを示し語らい、着実に実行されてきました。6月15日からの展示「この沼の自然」は、渡部さん最後の提唱であり、最後のプロデュースとなりました。19日には体調を押して来展し、確認をされたところでした。一部の手直しの指示がありましたが、内心満足されたこととみうけられ安堵しました。

貴方の残された資料はご子息のご協力を仰ぎ、きちっと整理して後世に伝えていきます。どうぞ安らかに召天した天上よりこの沼を語る会・この資料展示室の発展を見守ってください。

渡部 瞭さんの死を悼む

この沼を語る会会員 長谷川 祐

渡部瞭さんご夫妻とはこの沼を語る会でご一緒する以前から、私の姉の嫁ぎ先である池田正博家の庭で偶然生き残っていた“メダカ”が絶滅したと思われていた“藤沢メダカ”と判明するまでの過程で大変お世話になりました。故渡部さんも奥様と共にその普及拡大にご努力いただいたことだけでなく… 私の父の従兄弟である画家の長谷川路可の画歴、業績について深くご研究下さり、長谷川路可の

名を広く藤沢市民にご紹介下さったことでも当長谷川家にとってかけ替えのない方を失い、誠に残念としか云い表せません。

“鵠沼を語る会”でも有田会長ほか、内藤、岡田、竹内さんらと共に正に中心人物として大活躍して下さっただけに失われた痛みは簡単には消せないと思います。まだまだ鵠沼の歴史を探る上でご尽力を賜りたかったと思うのは会員全員の思いでしょう。心からご冥福をお祈りして今迄のお礼にかえたいと思います。

安らかに

鵠沼を語る会会員 原 雅子

六月二十三日の夜、駅から帰宅途中で有田会長にばったりお会いして語る会の誰もが信頼を寄せておりました渡部瞭さんの悲報を知りました。闘病中とは伺っておりましたが、こんなに早く、と言葉が出ませんでした。

思えば渡部瞭さんと初めてお目にかかったのは『語る会』に入れていただいた十年ほど前のことでした。高校で地理の教師をされていたとお聞きして、早速子供時代の起伏に富んだ鵠沼の砂丘や沢山あった沼の風景など感懐に浸りながらお話ししたら、大変優しく説明してくださり感激した思い出があります。

また、二年前には、『相模国準四国八十八箇所』の札所めぐりを茅ヶ崎方面にご一緒させていただきました。この八十八箇所は、もとはと言えはかつて鵠沼の住人が私財を投じて作ったものだというお話をされ、巡る順序を綿密に前もって準備され、当日は実に要領よく導いてくださいました。

最近では、例会の後に「鵠沼と岸田劉生」の展示についてご病気とは思えない張りのあるお声で一時間余りも立ったまま解説いただきました。あれもこれもついで、昨日のこことのように目に焼きついております。あまりにも早く逝かれてしまい、この無念さは会員みなさまの共通の想いだと思います。どんな話題が出ても硬軟を問わず博覧強記な渡部瞭さん、まだまだこれから様々な鵠沼をお教えいただきたかったです。

バプテスト教会でのお訣れのときの奥様の愛情溢れるご挨拶には強く胸を打たれ思わず涙してしまいました。平素の瞭さんのお人柄が偲ばれて、一入無念さがこみ上げてまいりました。最後まで語る会を愛し真摯に取り組んでくださいました渡部瞭さんに、会員の一人として心から感謝申し上げ、心から哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。

回想断片

鵠沼を語る会会員 森岡 澄

鵠沼を語る会に入会して間もない僕としては、渡部瞭さんとの個人的な会話はただ一度のみ、天野芳太郎についての立ち話程度のものであった。「大変博識の方でネエ…」博識の渡部さんの言葉だけに強い印象が残っている。もっと伺いたい！と機会を狙っていた僕だった。T 氏から闘病中と聞いていたが、最後の仕事になった「鵠沼の自然」にしても「岸田劉生」にしても八面六臂のいきいきとした活動には愕き入るばかりだった「処々では生き生きしていますが、家では死んでますヨ」という奥さまの言葉があった。小田急の車内ポスターに角ゴジの見出しで「人生を変えた伝説の名授業」(文春)が目に入った。渡部瞭先生の授業風景がイメージされた。その授業を経験した諸氏を羨ましく思った。

渡部瞭さん逝去の FAX が届いた頃、僕はアメリカ帰りの友人と、富士五合目にいたようだ。凄みのある夕暮れであった。一日の営みを終えた太陽が自らの光の矢に傷つき体じゅうから血を流しているようだ。夕暮れは夕暮れの彼方へ拡がって永遠につながった時間は無限で、平和で、計り知れないものに思えた。

召命の天はるかなる夏至の旅

融

(詩人 河井醉茗のご子息 島本 融氏 作)

鵠沼を語る会会員 渡部 かほり

素晴らしい「鵠沼を語る会」の皆様に見守られて、鵠沼大好き人間、鵠沼をとことん愛し続けた渡部瞭(黒部五郎)は6月23日午後2時30分、71年を生きぬき召天しました。最後の面会者は、有田会長・内藤さん・和子さん・淳子さん。

何よりも「語る会」の皆様との幸せな出会いの10年間、ご指導いただきながら楽しみ、毎日、「今が人生で一番よい時だ」と張り切っておりました。いつも夢を見、幻を語る、こだわりの塊でしたから、様々のご迷惑を皆様におかけしたと存じます。心よりお詫びし、それにも拘らずご厚情をいただいたことに心より感謝しています。これから、どうかずっと繋がっていただきたいと家族一同願っております。

クチナシのかほり漂う季節から、いつしかキンモクセイの季節に。花は白い半夏生から真っ赤な彼岸花に。100日が過ぎました。

1940(昭和 15)年東京で生を受けた際は虚弱だったため転地療養として、榛葉昭市家の離れをお借りし、幼児より鵠沼で育ち・遊び・学び、榛葉昭市氏との出会が「鵠沼を語る会」に定年退職した 2001(平成 13)年 4 月、入会させていただくことになりました。おりしも、藤沢市環境部みどり課より編集執筆を依頼され、2001 年 3 月 31 日発行の藤沢の自然 No. 26「鵠沼の自然」をお土産に例会に出席させていただいたのが昨日のことに思われます。

入会早々、会誌『鵠沼』を読ませていただき、日課として 2 万 5 千分の 1 の地図を片手に自転車で鵠沼巡検。踏査した道路を赤く塗りつぶし、1 か月で真っ赤な地図に変身していました。『鵠沼の自然』を詳しく調べたいと語っていた際は、学名に鵠沼がつくホウネンエビ(クゲヌマエンシス)が発生する 6 月に、生態展示するのが夢でした。ショウロやクゲヌマランもあれば。

2012 年 6 月 15 日～9 月 15 日に『鵠沼の自然』企画が鵠沼郷土資料展示室で始まり、願い達成の時と病床で毎日気にしていましたが、残念ながらクゲヌマエンシスは今年、発生しませんでした。また、いつか企画しなさいとの無言の遺言でしょうか。かろうじて絶滅危惧種の「藤沢メダカ」と水生シダ植物「田字ソウ」、また予想外の特定外来生物「アゾラ・クリスタータ・アメリカ」を水槽展示しました。

鵠沼の文化人 125 人の企画の時は『長谷川路可』と『福永陽一郎』に思い入れがあり、実地調査・踏査や資料収集に執着していました。ホームページ『黒部五郎の部屋』は多くの方々と出会い、教えていただき、「鵠沼を巡る千一話」は 334 話で終わりましたが、「頑張らない」をモットーにしていた本人はほほえんでいるでしょう。因みに、アドレスに使われている黒部五郎(Kurobe56)は北アルプス連峰にある黒部五郎岳から付けたもの。この山は竹内さんからの受け売りですが、「日本百名山」の作者深田久弥によれば、他に類例のない素晴らしい山であるが、目立たない不遇の天才のように見落とされている山、しんどい行程で近くに行かないと展望できない山。個性が世に認められるまでには、まだ年月を必要としよう。黒部五郎岳が To the happy few の山であることは好ましい限り。

「鵠沼を語る会」の研究の素晴らしさは鵠沼の誇りであり、40 万都市藤沢に博物館や美術館などが必ず出来る時の大きな土台財産になる、といつも語っていました。「鵠沼を語る会」万歳。皆様、ありがとうございました。

* タイトルの句は 召天の知らせを受けて 島本 融氏が詠まれたものです。

渡部 暲氏の会誌「鵠沼」への寄稿リスト

- 鵠 大きく拵がったメダカの輪 鵠沼 84 号 2002
- 鵠 川袋低湿地形成と蓮池の変遷(序説) 鵠沼 85 号 2002
- 鵠 旅先で出会った三人の鵠沼人の仕事 一天野芳太郎・長谷川路可・杉原千畝—
鵠沼 86 号 2003
- 鵠 福永陽一郎と藤沢市民オペラ 【上】 鵠沼 87 号 2003
- 鵠 福永陽一郎と藤沢市民オペラ 【下】 鵠沼 88 号 2004
- 鵠 高瀬彌一の祖父と父 鵠沼 89 号 2004
- 鵠 鵠沼人=高瀬弥一 鵠沼 89 号 2004
- 鵠 鵠沼海岸別荘地開発記念碑と登場人物 鵠沼 90 号 2005
- 鵠 鵠沼海岸別荘地開発記念碑 WEB 版
- 鵠 民草の闘い ー日本電気硝子公害と万福寺ー 鵠沼 90 号 2005
- 鵠 物心と戦争 鵠沼 91 号 2005
- 鵠 鵠沼を語る会 30 年の歩み 4. 項目別活動状況 鵠沼 92 号 2006
- 鵠 千葉県我孫子市と鵠沼の不思議な縁 鵠沼 92 号 2006
- 鵠 公開講座鵠沼学入門(I・II) 鵠沼 92 号 2006
- 鵠 会誌『鵠沼』記念号の発行 鵠沼 92 号 2006
- 鵠 鵠沼の西縁を歩く 史跡見学 鵠沼 93 号 2006
- 鵠 全国に鵠を追う ～クグイ・クグ地名分布とその特色 鵠沼 94 号 2007
- 鵠 大給子爵家こぼればなし 鵠沼 94 号 2007
- 鵠 長谷川路可伝 【上】 鵠沼 95 号 2007
- 鵠 長谷川路可伝 【中】 鵠沼 96 号 2008
- 鵠 長谷川路可伝 【下】 鵠沼 97 号 2008
- 鵠 森志げ女『死の家』に見る鵠沼村 鵠沼 98 号 2009
- 鵠 鵠沼の生き物あれこれ ーゆかりの生物と外来生物ー 鵠沼 101 号 2010
- 鵠 劉生「鵠沼風景」の舞台検証 鵠沼 104 号 2012
- 鵠 首塚の碑再建 鵠沼 104 号 2012
- 鵠 鵠沼に関する年表 鵠沼を語る会ホームページ
- 鵠 鵠沼に関する地図 鵠沼を語る会ホームページ
- 鵠 鵠沼記念碑集 鵠沼を語る会ホームページ

■渡部瞭氏が、どのような経緯で「鵠沼を語る会」に入会し、入会当時、「鵠沼を語る会」は氏の目にどのように映ったのかなどを綴った『老後の楽しみ方』と題した一文が「県民図書室 共同時空 2007」に掲載されています。渡部瞭氏の側面をもう少し知る意味で、追悼ページの締めくくりとして紹介します■

老後の楽しみ方

渡部 瞭

最近の話題の一つに「2007 年問題」というのがある。「団塊の世代」の諸氏が定年を迎え、大量の「リタイヤ組」が巷に溢れるというのだ。後半生を如何に生きるかに悩むという。

小生の場合、定年退職を間近に控えた 60 歳の 2 月に軽度の脳梗塞になり、右半身に痺れを感じたので、再雇用の話もあったのだが、お断りした。以後、かなり純粋な年金生活者である。脳梗塞の方は軽度ですんだので、普通に口もきけるし、こうやってパソコンのキーボードをたたけるし、自転車もこげる。つまり、普通の生活に特に支障はない。気がつく指先に若干の痺れが残っているなど自覚する程度である。

以来、いつやめてもかまわない、自分の気に入ったことだけをするように心がけている。幸い好きなことは山ほどある。その中で自分のキャパシティーからはみ出ない程度に絞って行動範囲を選んでいる。

まず、定年退職より前からワイフが小学校の教員を中心とした「藤沢メダカの学校をつくる会」を組織し、その会長に就任した。ちょうどホームページという情報発信手段に関心を持ち始めた段階だったので、会の「広報担当」ということでホームページを立ち上げた。するとたちまち全国各地から反応が返ってきた。これがなかなか面白い。これに味を占めて、所属する音楽鑑賞団体、宗教団体、出身高校の部活のOB会などのホームページ作りを引き受けることになった。

次に市教委が刊行する藤沢の自然シリーズの『身近な川と水辺』の編集を引き受け、この 3 月末に発行できた。中学校の教員や市民自然愛好家のグループが 3 年間月 2 回のフィールド調査の結果を「こんな本があったら」という観点からまとめたユニークな本である。

さらに、退職以前から気になっていたが、活動日が平日の午前中ということな

ので、加盟できずにいた地域研究サークル「鵠沼を語る会」に定年と同時に加盟した。鵠沼とは藤沢市の海岸部中央を占める旧鵠沼村の地区で、小生の自宅はその中心部に位置する。中央を走る小田急江ノ島線付近を境界として、北西部は1100年の歴史をもつ半農半漁村、南東部は110年の歴史しか持たない日本初の別荘分譲地と海浜観光地という二面性を持つ。地域研究の対象としては実に魅力的な場所である。

会の発足は30年ばかり前。当初は商店主たちが思い出話などを「語る会」だったようだが、次第に郷土史研究家や新聞記者なども加わり、かなり高レベルな研究活動も行われるようになってきた。

現在の会員は65名ほど。商店主や農家、大工の棟梁、僧侶、地方政治家（保守から革新まで多種多様）、元編集者や新聞記者、一級建築士、元銀行マンや証券マン、小生のような元教員など、実に様々である。そのほとんどは老人層で、若い世代では昼間は暇なバーテンがいる程度だ。元神高教組合員も3人ほどいる。

地域文化の保存にも力を入れ、行政当局にも時に意見を申し述べることもある（会員に地方議員がいると、こういうときには便利だ）。

現在小生は会誌の編集を担当しているが、小生の前任者というのが凄い。日本評論社の主宰者で、かの「横浜事件」で逮捕され、獄中で終戦を迎えたというS氏である。90歳になったとき、「卒寿になったので、この仕事は卒業したい。渡部さんあとを引き受けてもらえませんか」と頼まれた。何しろ日本を代表するエディターの一人である。誰が後任になっても荷が重い。小生といえば「神高教50年史」の編集長ということになっているが、実質上の編集長は山際さんだった。かなり迷った末、「尊敬する大先輩から見込まれたことを誇りに思おう」と、やっと決断したのである。

会には物故した諸先輩が遺した郷土資料のたぐいが蓄積されている。それらはある会員宅の離れに保管されてきたが、管理責任や利用の便などの問題がある。そこで鵠沼公民館が新館を建てるとき、保管と閲覧のための部屋がほしいと提案した。それは実現したのだが、一サークルのために使用させるわけにはいかないということで、会とは別個に複数のサークルから代表が出て運営委員会を組織し、展示活動もすべきであるということになった。かくして「鵠沼郷土資料展示室」が誕生した。

40万都市藤沢市には、公立の博物館も美術館も文学館も、文化財展示施設は何一つないという全国唯一の市である。教育委員会の中に「博物館準備担当」とい

うのが置かれているが、藤沢市の 2020 年までの長期計画の中にも文化財展示施設の建設計画はない。博物館準備担当は市民ギャラリーで短期間の展示会を開くほか、「みゆネット」というバーチャル博物館をホームページ上に開設するのみである。藤沢市には多くの美術家が在住するが、作品を寄贈する先が市内に見あたらないので、わざわざ平塚市美術館に持ち込む有様だ。

鵜沼郷土資料展示室は、2003 年に公設民営展示施設として最初に開かれた。以来年に 3 回の企画展示を 3 か月ずつ公開している。今年、「明治郷土史料室」が生まれた。しかし、鵜沼も明治もアマチュアがボランティアで運営する施設で、学芸員もいない。例えば美術品などは保管責任の問題もあるので本物は展示できない。せいぜいコピーだけである。

小生は鵜沼を語る会から派遣されて展示室の運営委員を引き受けている。これがまたすこぶる楽しい。時折、小中学校の総合的な学習などの指導を依頼されたり、老人会その他様々な団体などを案内したり、講座を開く機会もある。

こうした活動を通じて得た「新発見」を二つご紹介しよう。

■ 広田弘毅・杉原千畝・森島守人という、戦後全く違う道を歩く（広田は A 級戦犯として絞首刑）ことになる 3 人の元外交官は、鵜沼に住んだという共通点の他に、旧満州においてソ連の参戦を防ぐという共通の目的のために協力して活動した時期があった。

■ 今や「旧」という冠詞をつけなければならなくなった教育基本法は、教育刷新委員会（初代会長、安倍能成元文相）のもとで審議され、具体的な策定作業には田中二郎・東京大教授が中心人物として参画した。安倍は 20 代の頃鵜沼藤が谷に住み、後年鵜沼海岸に別荘を構え、一方の田中は晩年鵜沼松が岡に居を構え、この地で没した。

＜掲載：県民図書室 共同時空 2007＞

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成24年4月～平成24年9月) 総務担当

運営委員会 3月27日(火) 12名出席

平成24年4月例会 4月10日(火) 10時～12時 23名出席

議題1 会誌104号について — 出席者に席上配布した。欠席者には従来通り別途配布とした。今回からコーヒープレーク欄を新たに設けた。テーマは自由、第一回目は最高齢の鈴木会員にお願いした。

議題2 平成24年度活動提案・要望について — 叩き台案が説明されその他について広く会員からの提案を要請された。

議題3 その他 — 今井クニさん(故今井達夫氏夫人)逝去の報告ならびに公民館まつりのテーマ案の募集展開がされた。

フリートーク『鵠沼の古い地名』竹内会員、佐藤弘会員のコーディネートにより闊達に意見交換された。

お話— 郷土資料展示室にて『鵠沼発祥の地 鵠沼神明』および『なつかしき学び舎 第一中学校』を説明を受けながら見学した。

運営委員会 4月24日(火) 8名出席

第26回総会・5月例会 5月8日(火) 10時～12時 26名出席

総会 — 中島会員の司会により有田会長、平岩鵠沼市民センター長の挨拶の後、配付議案書の審議を行なった。平成23年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画、予算案の提案がされ、全会一致で承認された。

主な内容、今年度事業計画案

全員で取組むもの — 公民館まつり展示、史跡めぐり、藤沢の巨樹めぐり、フリートーク。

グループで取組むもの — 今井達夫『馬込文学村二十年』製本化、鵠沼と芥川龍之介。

その他 — 相応しいテーマが発生した都度追加して行く。

5月例会

議題1 藤沢の巨樹めぐり第2回下見会報告 — 4月17日に行なった六会、長後地域の巨樹の9ヶ所13本について、映像をみながら参加者に説明

してもらい、感想も述べてもらった。

議題2 『馬込文学村二十年』刊行計画について— 状況報告がされた。

運営委員会

5月29日(火)

11名出席

平成24年6月例会 6月12日(火) 10時～12時

21名出席

司会進行 有田会長

新会員の紹介ならびに挨拶を受けた。

議題1 今井達夫原稿の活字化について — 『馬込文学村二十年』の原稿について新たな発見があり、その内容が説明された。

議題2 藤沢の巨樹めぐり第3回下見会報告 — 5月22日に行なった六会、藤沢地域の巨樹の9ヶ所15本について、映像をみながら参加者に説明してもらった。

議題3 その他 — 小林会員より、参加した講演会『藤沢の神社建築』の内容の報告があった。江ノ島道の道標について新発見と私見が披露された。

お話— 『芥川龍之介ゆかりの場所をめぐる』 散策の予定であったが雨天により延期となった。代りに中島会員により資料による事前説明がされた。

運営委員会

6月26日(火)

5名出席

平成24年7月例会 7月10日(火) 10時～12時15分 20名出席

進行役 中島会員

故渡部瞭会員のために黙祷、かほり夫人よりお礼の言葉をいただいた。

(本号の追悼文他本文参照願います)

議題1 公民館まつりのテーマについて — 運営委員会の案として芥川龍之介にまつわる展示が提案されたが、他の案の募集も展開された。

議題2 今井達夫原稿『鵠沼物語』の活字化について — 原稿の状況とパソコン入力協力者の展開があった。

議題3 その他 — 故渡部瞭さんが主に企画、作成した郷土資料展示室の『鵠沼の自然』の展示を10分程見学し散策に出発した。(本格的な見学は8月に予定)

お話— 『芥川龍之介ゆかりの場所をめぐる』

中島会員の案内により、鵠沼公民館から鵠沼海岸までを散策した。

(本号の本文参照) 参加者17名

運営委員会

7月31日(火)

9名出席

平成24年8月例会 8月14日（火）10時～12時 21名出席

進行役 柴田会員

議題1 公民館まつりの展示について — 芥川龍之介生誕 120 年に伴い、芥川と鵜沼との関わりについて展示することになった。

議題2 会誌について — 会誌 105 号の編集状況が報告された。

議題3 先月の芥川ゆかりの地散策の感想 — 参加者の一部（6 名）の方から述べてもらった。

お話— 故渡部暲さんが主に企画、作成した郷土資料展示室の『鵜沼の自然』の展示を内藤会員、竹内会員の解説を聞きながら見学した。

運営委員会 8月28日（火） 11名出席

平成24年9月例会 9月11日（火）10時～12時 23名出席

進行役 柴田会員

議題1 会誌105号について — 原稿の提出状況の報告と故渡部暲さんへの追悼文募集の展開がされた。

議題2 公民館まつりについて — 展示構想の説明があった。

議題3 巨樹巡り第4回下見会について — 10月23日予定とその後の計画（本番の考え方）について説明があった。

議題4 『馬込文学村二十年』刊行計画について — 冊子制作の進捗状況が報告された。

議題5 その他 — 公民館まつりの協力応援について展開があり、決定した。

お話— 『長崎に長谷川路可をたずねて』 — 中島会員

長谷川路可の人と作品について、映像を交えて説明された。

運営委員会 9月25日（火） 9名出席

新しく加入された会員（4月から9月入会 敬称略）

呉 吉煥 （くれ よしお）

福地 美沙子 （ふくち みさこ）

山名 雅子 （やまな まさこ）

参考： 会員総数 61名（9月末日現在）

（文責 佐藤 弘）

編集後記

- *この上半期は、いろいろな意味で記録づくめでした。うれしい記録ではロンドンオリンピックでメダル獲得数が史上最多。うれしくない方の記録は熱帯夜連続記録、夏期最少降雨量記録とつづきました。気象異常はわが国のみならず世界的で、北極海の氷の面積が過去最小とか、干ばつによる農産物の収穫量が激減とか、いずれ諸物価高騰を呼び、我が家の台所まで様々な形で影響しそうです。
- * 鶴沼書店物語は、この夏長い歴史に終止符を打った鶴沼書店の物語です。鶴沼海岸駅前にあって、地域文化の担い手でもあった同書店には思い出のある会員も多いことでしょう。店主だった福地さんに書いて頂きました。なお福地さんは当会に入会されました。
- * 史跡めぐり「鶴沼の芥川龍之介ゆかりの場所めぐり」は、開催日が7月にずれ込み暑い中で行われましたが 17 名が参加されました。その見学記を森岡会員にお願いしました。
- * 「藤沢橋周辺の大師像の動向」は、相模国準四国八十八ヶ所の調査以後、有田会員が関心を持って調べたことを発表されました。
- * 山上会員の「くげぬま断章」は、五回目となり、ますます佳境へ。鶴沼にゆかりのある作家を毎回一人ずつ取り上げられています。今回は徳富蘆花です。
- * 大正末期で途絶えた「鶴沼の雨乞い行事」について内藤千代子の文章と岸田劉生のスケッチが、その有様を活写しています。その他の資料を集め、岡田会員が執筆しました。
- * 会員が自由に気ままな事を書けるコーナー「**Coffee break**」は、綿谷会員が書いて下さいました。投稿（2 ページ内外）歓迎。
- * 今井達夫遺稿、第 10 作目は「望郷」を掲載しました。今井の親類の人の実話をもとに書かれたものです。「望郷の背景について」を併わせて読まれば、一段と興味が増すことでしょう。
- * 渡部瞭副会長の訃報には多くの会員は驚かれたことでしょう。あらためて彼の活動の大きさと幅広さに思い至ります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。募集した追悼文は多くの会員から寄せられました。目次ページはそのお名前を記すスペースがありません。ご了承下さい。

（岡田）

『鵜沼』 第105号

平成24年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会

藤沢市鵜沼海岸 2-10-3

鵜沼公民館内

電話 0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>